介類雜誌

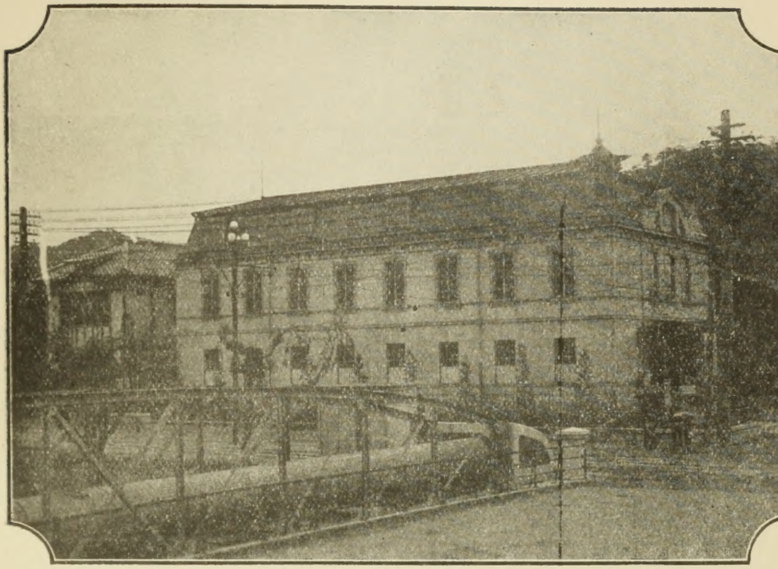
第四卷 第一號

大正四年八月一日發行

 (年四回發行)

目次

京都平瀬介館發行



平。瀨。貝。類。博。物。館。

本館創立　貝類採集并ニ研究ニ從事スルコト將ニ三十年、大正二年三月二十二日開館、同廿四日公開

東宮行啓　大正二年三月三十一日　皇太子殿下并ニ二皇子殿下ノ行啓ヲ辱フス

東洋唯一　本館ノ事業ハ東洋唯一ニシテ歐米ニモ未ダ貝類專門ノ博物館アルヲ聞カズ

貝類標本　學術的、工藝的及ビ觀賞的標本ハ勿論珍貝奇介ノ陳列恰モ萬花ノ美ヲ競フガ如シ

參考諸品　内外產貝類製品、及ビ貝類應用品頗ル多シ、例ヘバイタリア式彫刻、各種貝細工、芝山細工、通貨、花瓶、織物、繪畫、圖案、菓子、陶器、漆器、刀劔、人形、玩具等ノ如シ

館內賣店　貝類標本各種、貝類製品各種、貝類應用品各種、貝類ニ關スル圖書繪葉書等多數アリ、土產贈物ニ適スルモノ多シ

外國寄贈　ワシントン及ビニューヨーク博物館其他歐米學者ノ寄贈品多シ

位置眺望　本館ハ京都市動物園南ニアリ、館前ニ京電停留場アリ、交通至便、樓上ニ休憩室アリ、疏水、動物園、東山等ノ眺望絕佳

趣味實益　貝類ハ學者、美術家ノミナラズ、婦人、子供ニモ面白ク趣味ヲ養ヒ智識ヲ增シ甚ダ有益ナリ何人モ一覽アレ

獨力經營　本館ノ事業ハ館主ノ獨立經營ニシテ其ノ苦心容易ナラズ有志諸君ノ同情ヲ希望ス

學生歡迎　何人ノ觀覽モ望ム所ナレド殊ニ學生諸君ヲ歡迎スルタメ團體入場料ヲ大ニ輕減ス普通ハ大人五錢小人參錢、二十人以上半減五十人以上大人貳錢小人壹錢トス

介類雜誌 第四卷第一號

大正四年八月一日發行

續刊の辭

余が「介類雜誌」を發刊せしは明治四十年一月なりき、爾來二年四ヶ月の間同好の助力と讀者の同情とにより拮据經營同誌を月刊せしが同四十二年四月に至り第三卷第四號を以て遂に暫時休刊の止むなきに至りたり、其後余は貝類博物館建設の事に從ひ、亦た他を顧るの暇なく、苦心慘憺一昨年三月二十二日幸に開館の式を擧ぐることを得たりと雖も、之が爲めに事業の範圍頓に廣まり、從つて余の費す所從前に倍蓰し、内外多難、事志と違ひ、加ふるに昨夏重患にかゝり本誌續刊の事常に念頭を去る能はざりしも已むを得ず荏苒今日に至りたり。

顧れば余が再刊を約して本誌を休刊せしは僅かに一二年前の事の如く感ぜらるゝも已に滿六ヶ年を經過し其間に代は大正と改まり、二回諒闇に遭ひ、日獨戰爭も己に終結を告げ啻に世事の變遷甚しきのみならず、科學界の進歩も亦實に驚く可きものあり、今にして前約を踏まずんば病羸の身益す白髮を加へ遂に諸君に辜負せんことを恐る、是れ余が百忙の中に螳螂の斧を揮つて本誌を續刊する所以なり、然れども余が現状は時間經費共に本誌の月刊を許さず、依て暫らく年四回の發行に滿足し以て他日の發展を期せんと欲す。

大正四年七月　平瀬與一郎

介類雜誌の續刊に際し所感を述ぶ

田中茂穂

平瀨介館主平瀨與一郎君から今回貝類界と云ふ雜誌を創刊せらるゝとの御通知を受けて學界の爲め頗る目出度い事と思ふ然かし平瀨君の曾て經營せられた介類雜誌が中途休刊と成つて居るのは何と考へても殘り惜しい感じがする今日の狀態にては從來の如き介類雜誌の性質のものは今暫く後廻はしとし稍や內容の變はつて居る貝類界を發行せらるゝのが急務かも知らぬが小生は假令內容に於て變更があるにしても介類雜誌の續刊とした方が寧ろ宜しくはないかと考へた爲め平瀨君に此の事を提議して置いたが小生一個の愚見のみを採用せられたのではあるまいが終に介類雜誌の續刊とするとの御通知に接し小生は一方ならず愉快を感じ此の雜誌の運命目出度からんことを祈る次第である

扨て曩きに貝類界發刊の通知のあつた時に、余にも何か書けとの御依賴であつた、余は貝類を專攻して居るものではないが、動物學の一部たる貝學に關することではあるし、また貝と同じく余の專攻して居る魚類も多くは水中殊に海中に居るものであるから、研究上似通つて居る處もあるし、今一つは平瀨君の如き大規模ではないが、余も專攻して居る方面には多少の事業を經營して居るので此等種々の事情から、目出度き發刊に際し、ツマラぬ所感を述べて見ようと思ふのである。

平瀨君の現に經營せられて居るもの、過去に經營せられたること又は將來着手せられんとする經營事業の方面に就て考ふるに、中々種々の困難が蟠

つて居つて、世の同情者が少しなりとも之に應援するの切なる處があると思ふ、之れは余が親しく平瀬君に就て詳しく聞き取つた譯ではないが、余が自ら經營して居る事業と較べて正に然るべきものであらうと思ふ、また具體的の實證として引用すると、曾て平瀬君の着手せられたる介類雜誌の如きは、中々有益なものであつたが、數年にして中絶して居たが、斯の如きものに對しては世の人々に少々同情心さへあれば圓滑に運轉し得らるべきであるが、その同情家たる人々が餘りに少いのである、余自身でも苦き經驗を嘗めたことは何回かも知れぬので、例へば或人に向つて歎願して購讀して貰つたものが若干(固より少數ではあるが)あるが、その人々などの多數は多くは購讀を中絶して了つた、固より之には却つて向ふ樣に對し當方より同情せねばならぬこともあるか知らぬが、兎に角購讀者は思ふだけに達せぬのみならず、舊購讀者は漸次に減少する、然かし又た一方に新讀者を出すので、増減は殆ど相殺するが、それでも増加するの域に達せぬ、ドオシテも專門の雜誌又は一局部に偏したる雜誌の購讀者數は略ぼ一定し居るものゝ如く見ゆる、此の故に購讀者の數が略ぼ一定して居つて、其定數が多くは收支相償ふに至ること遠い爲に、往々廢刊又は中絶するの止むを得ざる破目に達するのである、今回平瀬君の續刊せらるゝ介類雜誌は標題の示す通り貝類に關する雜誌たるは疑ふべからざる事であるが、其内容の程度の如きは如何なるものであるか、一日も早く見たいと考へる次第であつて、平瀬君も多年の經驗によつての計畫であるから、萬違算なからんことを期せられ、目出度く發展するものと考へるのであるけれども、前にも云ふ通り如何なる内容と

せらるゝにしても、専門雜誌で、一局部に偏したる(動物の内の貝類に關する)ものであるから(設令、廣く貝類に關することを網羅するとしても、讀者は標題を見て、貝類に關する一局部の雜誌と速斷する)、充分の結果を得らるゝは困難のことゝ思ふが、平瀨君一生の事業に關することであるしまた此の雜誌を讀んで同趣味の人を利益することは必ず多いことゝ信ずるから、充分に發展せんことを祈る次第である。

貝の類は多く海中に住んで居るが、その爲めに甲の海と乙の海とは直接間接に連續して居るものである、此の點に就ては魚類とも大に一致して居る、故に支那の海と日本の海とに同一の種類が居るとしても左程怪むに足らぬ、その爲めに魚類や貝の分布に關することは從來左程重要の位置を占めぬこれが陸生動物であるとしたならば、例へば象は今日日本に住まぬが、化石時代から象の遺骨が出ると云ふことがあるとすると亞細亞大陸と日本との連絡に就て面白い推論が出來るから、餘程面白味を感ぜらるゝ、尤も貝殼だの魚骨だのが陸上から出るとするとその土地が曾て海底たることを示すのであるけれども到底陸棲動物の如く海を隔てて今日連絡なき土地の曾て連續したる時代を想像するが如き大問題に逢着せぬ、然るに今日の研究の如くその精密の度增加したる時代に於ては曾て同一種たりと思つたものも別種であるといふことになつたし、また設令同一種のものでも土地により變異のあることが知られて來たから、固より此の點は陸棲のものも海棲のものも同樣であるが、貝や魚類の如きものも、例へば東京附近のものと青森附近のものと、瀨戸内海のものとで種類によつては可なり眼につく相異點を見るを得るに至つ

た、斯の如く相違點の見らるゝに至つたのと同時に、斯の如く比較的近き場所にて、然かも比較的連絡のあるかと思はるゝ土地に住んで居るものが何故に異なるに至つたかと云ふ理由に至つては說明を附しがたい場合が多いが、此の點を闡明することは進化論上頗る重要なことであつて、此點に於て初めて魚類や貝の學問が動物學上重きをなすに至るのである、貝類や魚類は同じく動物の一類であるから、廣く動物學の立脚點から考へると種々面白い現象が見られる、魚類と貝類とは棲息場所を同じくし、生活狀態が似て居るから、此等兩類に共通の面白い點のあるのは自明のことであるが、更に廣く動物界中の一類として研究しても貝の研究が動物學に貢献する處は頗る多いのである是れ前に云へる處を除くにしても貝の類が動物界の一類であるから、必ず動物學上の法則に合致すべき筈である爲めである。

最後に述べたいと思ふのは此の雜誌が充分に發展するには固より平瀨君の努力を俟つ次第であるがまた少數なりとも讀者の增加する必要があると信ずることである、此雜誌の永續及び發展を希望せらるゝ人は成るべく讀者の增加せんことを努められたいと思ふのである。

貴誌の再刊を祝す

松原新之助

邦人の計畫及び研究は歐米人の夫れに比して一般に輕薄で且つ執着力に乏しい、獨我平瀨君は例外にて貝類の研究に多大の趣味を有し一生の精力と多大の財力とを費して愈々廣く倍々深く之に從事せらるゝことは私の深く敬服する所である、獨

力貝類の博物館を經營維持して行くすら容易の業であるまいと思はるゝに、曩に數年間發刊して學界に少からぬ貢献を與へられた介類雜誌を再び發行せらるゝに至つた事は實に篤志の擧と言はなければならぬ、本邦に於て如此一事を狹く深く專門的に研究することは他に類例尠く殊に貝類の研究は本誌を措いて世に求むることが出來ないので本誌の發行は實に學界及び事業界の爲め慶ぶべきことである、私は爰に本誌の再刊を祝し今後の發展を祈つて歇まない。

介類雜誌の續刊を祝す

柏木義圓

宇宙は神の顯現にして眞、善、美の無盡藏なり人生何事か之を啓發して其を世に顯章するより樂しきことあらんや、貝類の世界は自然界の美觀なり、平瀨翁が財を惜しまず勞を厭はず十年一日の如く之を研鑽して倦まざるもの蓋し其の樂しみ止む可らざるものありしに由るなり、而して其の精力の傾注する所新種屬の發見となりて世界の學界に貢獻し「ヒラセ」の名を冠せらるゝの貝類尠なからず更に其の苦心多年蒐集せし珍品は貝類博物館となりて造化の美を發揚して博物の趣味を鼓吹し、今や尚ほ先きに休刊せられし「介類雜誌」を續刊して其研究の結果を公けにして世を益する所あらんとす、蓋し衆と其樂しみを共にするの意か、欽羨に堪へざるなり、欣然蕪辭を綴て介類雜誌の續刊を祝す。

祝　辭

足利武千代

介類世界の眞想を人類に紹介せんがために獨力貝類博物館を起し、資料標本の蒐集、其他書册の刊行等により て斯道に於ける人智の開發に盡瘁せらるゝ平瀨君は曩に休刊せられたる介類雜誌を再興せられんとするの嘉報を得たり、君資性温厚にして眞摯、斯業經營のためには堅忍不拔の精神を以て當たられ、其熱心熱情たるや、殆んど『吾を食へり』との聖語を想ひ起さしむ、嘗て人あり、戯に君を目して介類狂と呼べり、予は茲に君の熱心を愛慕し、君の人格に敬意を表して介類王の賛辭を呈し、以て雜誌再刊の前途を祝せんとすと云爾、

介類雜誌の續刊を祝す

師友介類雜誌と盡きぬ名殘を惜しみて袂を別ちしは四十二年春の央ば頃であつた。爛漫たる櫻花も新綠滴るが如き春色も我心情を慰むる事が出來なかつた。淋しき佗住居に何日かは歳月を重ねつゝ早や六歳。大正四年の新春を迎ふる事になつたが計らずも一陽來復＝再び懷かしき君と相見ゆる事が出來る樣になつた。生の欣びは如何ばかりか一入懷舊の情に堪へぬ。切に幸先永く斯界を指導し給はん事を併せて君の祝福を祈る次第である。

大正四年孟春

舞子介類館にて　矢倉甫田生

介類雜誌の再刊を祝して希望を述ぶ

播磨　大上宇一

先きに介類雜誌の休刊となるや、愛子に死に別れたるの思ひありき、所謂「一年待てどもまだ見ねぬ、二年待てどもまだ見ねぬ」の感ありしが此度計らずも再刊の報に接し死兒の蘇生せるを迎ふる如く雀躍に堪へず、從つて其益々健全に發育せん事を祈りて止まざるなり、夫れ我國は已に世界の一等國に列したれば歐米の先進國と比肩し行く上に於ては實業にまれ、學術にまれ必ずや國を飾るに足るべきものなからざるべからず、平瀨先生茲に見るあり未だ世界に其例を聞ざる貝類博物館を私設し、數萬の標本を海の内外より蒐集し、日本國產の新種を發見すること一千餘種、特に日本貝類圖說を發行して世界の學界を利し又介類雜誌を再刊して斯學界の新智識を內外人に分たんとす、之れ豈に我一等國を飾るに足るべき一事業に非ずや故に余は本誌の末永く健全に發達せん事を希望して以て祝詞となす、

貝十句　　蝸鳩

乙姫の袖や花貝さくら貝
磯の家に誰をまつかや砧貝
住吉の松に塵の世わすれ貝
蛤の之もたぐひか雀貝
聲もなく淡路へ通ふ千鳥貝
荒磯になでしこ貝の優しさよ
花紅葉なくも磯家の錦貝
龍宮の夢やさめたる枕貝
海の色も紫貝や春の磯
戀しさに拾ひ入れけり都貝

Caecum屬の貝

理學博士　丘　淺次郎

高倉卯三磨君が去る明治四十四年の七月に相州松輪から持ち歸られた海水の中に珍らしい小さな貝が三疋偶然見附かつた、それは卷貝の一種で、殼の形は細長い圓筒形を僅に弓狀に曲げた如く、長さは約二「ミリ」に過ぎぬものであつた、蟲眼鏡で見ると、殼の一端から頭を出し、頭には一對の長い觸角があり、扁平な小さな足を動かして、硝子器の側壁を匍匐しながら微細な藻類などを喰ふて居る有樣が明に見ゐる、私は同君と毎日同じ部屋に居ること故、その後も始終この貝の樣子を見て居たが、今日に至るまで、別に大きくもならず形が變ることもなく、尙達者に生きて居る、私等は斯樣な貝を見るのは始めてであつた故最初は貝の大さから考へて恐らく何種かの貝の幼兒ででもあらうかと推察して、その成長するのを待つて居た、次には殼の形が普通の卷貝とは違ふて單に管狀をなして居る故、或はこれは狹い瓶の中で生活して居るために異常の發育をしたものでは無からうかとも考へた。

然るに今年(大正三年)の春四月に房州館山灣から持ち歸つた海水中に再び偶然に同樣な貝を見附けた、しかも、此度は僅に三疋だけではなく、少なくも二十疋位は外から見ゐるが、恐らく、尙隱れて居るものが澤山にあらう、容器は前のと同じく、採集用の筒形硝子瓶であるが半分ばかり海水を入れ、底には粗い砂が敷いてある、この瓶は高倉君が紐蟲類を生かして置くために海水を入れて持ち歸られたもので、最初は無論斯樣な貝が居ることを知らずに居たが、歸京後、常に注意して見

て居る中に氣が附いたのである、これらの貝も、皆今日まで達者に生活して居る。

さて斯樣に同じ形の貝が澤山に海中に居て、しかも長い年月の間に別段に成長する樣子も見ねぬ所から考へると、之は已に成長し終つた貝で、その殼の形も、この貝に固有の常型であるらしく思はれる所から、一體これは何と云ふ種類かと、手近にあつた二三の書物によつて、調べて見た、所が意外なことには、この貝は別に珍らしい種類ではなく、どの本にも、屬名も、圖も出て居るものと同屬か、若しくは之と頗る近いものであることが知れた、その屬と云ふのは *Caecum* である。

Caecum 屬は今日の貝類專門の書物には別に *Caecidae* と云ふ獨立の科を設けて、その中に入れてあるが、分類の簡單な古い書物、例へば Leunis の Synopsis の如き著書の中には「へびがひ」科 (*Vermetidae*) の中に編入してある、之によつて分類上凡そ何類に似たものであるかが知れる、今試に同書中の *Caecum* 屬の項を譯述して見ると次の如くである。

殼は幼時は圓盤狀後には長き管狀となり、螺旋部は消失す、管の上端は突起ある板にて鎖さる、殼口は圓形、殼蓋は角質にて渦卷あり、ヨーロッパ沿岸に產するもの約百種。

Leunis の書物には右の百種許ある中から僅に二種だけが揭げてあるが、その中の *C. glabrum* Mont. と稱するものゝ方は今回私等の見て居るものに頗る似て居る樣に思はれる、併し、特に調べた譯ではなく、且、ヨーロッパ產の百種類が互に如何なる點で相異なつて居るか少しも知らぬ故、種名に就ては素より何も云ふことは出來ぬ。

恐らく *Caecum* 屬の貝は我國の沿岸にも澤山

に產するもので、貝類專門の研究家には已に普通に知られて居るであらうが、私は偶然初めて實物を見、且私等の部屋にその達者に生活して居るものが多數に居る故非常に面白く思ふて、以上の通り同好の諸君に御知らせ致す次第である、

（大正三年十二月二十八日）

貝類の移動

理學博士　岸上謙吉

アハビは夜間食を求めて徘徊するを以て青森縣下北郡にては夜間海底に網を敷き、翌早朝此を引上ぐ、然る時はアハビは肉と殼との間に網絲を挾んで來る、然し嘗て自分の東京にて見たる約五寸のアハビには殼上に長八尺餘のホンダワラの着生し居たるを見たり、此に依て見る時はアハビの移動する事少きを思はしむ、此例に似て尚此よりも甚だしき例は先年樺太東海岸にて見たる一種の螺なり、二個並んで、而も互に反對の方に向き居る貝の上に跨りて幅二寸餘もある一本のコンブ根を擴げて離れる事の出來ぬ樣になりたるを見たり、其一個の螺の上には尚小きコンブ着生し居たり、兩方の螺は共に健全なりし、寒い地方とは言へ、海藻の生長する間兩方共に餘り動かざりしものと見ゆ、若し一方が動けば他のものは後方に引ずられる筈なり、以上の二例は動く樣に思はるるものも一向動かずして居る事あるを示す。

此に反し、アゲマキやマテの類の干潮の際穴を拔け出でて脚を曲げ同時に水管の口を閉ぢて脚の周圍より水を吐き出し深處に泳ぎ去るは意外なり、更に意外なるはハマグリの比重輕き粘液を長く吐きて此により體を水中に吊し、矢張干潮の際深處

に移動する事なり、此等は餘り動かぬと思はれ居る物の大に動く例なり。



第一圖

伊太利式彫刻（介殼利用。其二）

小松崎 三枝

貝殼にある種々の色層を巧みに配合し恰も顔料を以て色彩を施せるが如くに山水、花鳥、人物等を彫刻するの技は所謂伊太利式彫刻で古くより伊太利に行はれ珊瑚類の彫刻と共に伊太利獨特の技術として誇り名聲ある處のものである、その配合の美、彫刻の妙誠に佳致あるものである、されば同國にはこの技術が盛に行はれネープルなぞには學校樣のものがあつて職工を養成し益々技術の研鑽に努めてゐる。

この伊太利獨特の彫刻は近年我國人の手によつて作製せらるゝに至りその妙技伊太利製を凌がんとするのである、抑も我國に於る創始は日尚淺く去る明治四十一年水産講習所技師吉岡哲太郎氏が

歐洲に於ける水產業視察の際伊太利に於けるこの技術を視察し歸り淺井寬哉氏を講師と爲し同四十二年九月現業科として六名の生徒を入學せしめ翌四十三年七月四名の卒業生を出したのが實に創始である。淺井氏は元來貝類の彫刻殊に貝の嵌入に妙を得たる人であるが嘗て佛蘭西に日本畵の技師として招聘せられ同國に滯在中研究せし處があるので伊太利の標本によつて自ら研究したのでその一半は慥に氏の獨創の妙技によつたものである。

伊太利式彫刻の原料に適する貝類は殼質の厚きもの、種々の色層に富むものでなければ適せぬのである今日使用されてゐるものはタカラガヒ類。ホラガヒ。マンボウガヒ。チトセガヒ。ヤカウガヒ。リウテンラ。アカニシ。テフガヒ。シロマベ。クロマベ等であるが最も色層に富むものはタカラガヒの類で多きは九層十層を數ふる。製品は主として裝飾品でピン。ブロウチ。カフスボタン。バツクル。帶止。時計飾。ナイフ飾。簪。指輪。モノグラムピン。等を作るがマンボウガヒ。ホラガヒ。チトセガヒ。等は置物。花瓶。煙草吹空入等を作る。

貝類雜話(一)

陸前　鳥羽源藏

▲貝殼に關する迷信　岩手縣氣仙郡の沿海の村落を見廻る時は、人の日常出入する戶口、或は門戶の上に鯨骨、鱶鰭或は蒜或は神社より得たる樹皮、枝葉などを吊り下げ置くを見るが、時には鮑卽ちエゾアハビの貝殼などを垂れ下ぐる家さへあり。是等は、病魔の神の忌み嫌ふとの迷信より行ふものと思はる。又本村には蕁の神あり。この神には蕁

を患ふる者は、ニホガヒ、カモメガヒ等の穿孔せる石片を拾ひ來るか、或は鮑貝若くは椀に穴を明け糸にて貫き其の小祠に吊り下げて、治病を祈る者あり。これ孔のある物なるにより耳の穴のよく通ずる樣にとの願ひの意なるべきか。

▲東北産のハマグリ　我東北沿海に於ては、ハマグリは稀に産すれども、陸前の松島には、普通に捕獲され客膳に上るを見る。余の知る所にては靑森縣の八ノ戸附近まで産す。余が標本中東北産の最大の老貝は、長さ三寸五分高さ二寸七分ありて幅は割合に狹く扁平に見ゆるが一寸四分あり。きく所に據れば八戸に於ては舊藩時代放流移殖せし由、何時何處より何人が行ひしかは未だ詳かにせず。

▲エゾイガヒ　エゾイガヒは北海道に多産する由なれども、是迄本道に産するを聞かざりしに、一知人より靑森灣所産の美大なる物を得たり。同縣八戸港にも産する事は、採集せる破片を見て知れり。

▲東北に分布する暖海の貝　暖海に多かるべき貝類にして、往々東北の寒地にさへ分布する意外のものなきにあらず。是等詳細の事は、他日の記述に讓るも、先づカツラガヒ、及びマクラガヒは前記八戸に迄分布せり。カツラガヒは本郡にも産すれど、マクラガヒは當地に於ては未採品たり。遠く八戸迄北進し居るは、意外の事に屬す。

▲名所の貝類　相州の江ノ島、伊勢の二見、陸前の松島、其の他沿海の勝地、名所等にて種々の貝細工を販賣しをるが其の産地を聞けば其の地の産出なるをいふが常なり。余は松島に於てシヤコ、アフムガヒ、ホシダカラ等の産地を試に問ひしに金華山沖合にて捕りたる由を答へ（金華山は松島

灣に近き島なり）られ啞然たるを得ざりき。いかがはしき賣品によりて、貝の產地を調ぶるは頗る無意味の業といふべし。

▲田螺を以て火災を避く　春風、暖かに吹き渡りて水ぬるみ、泥中に蟄伏せる田螺も心地よげに動き出るの時節となれば、直ちに之れを捕獲し來りて礫となし住宅の屋根を投げ越し以て火難を免るの秘事となすは、岩手縣西磐井郡日形村地方の風習なりと。

▲鮹釣りの漁具　沖繩にてはテウセンフデガヒに釣具を裝置して、鮹釣りの擬餌を造るといふ。我が東北地方に在りては、時に大根或は白布を釣具に卷き附く事あるが鮹は貝類を嗜好する者なるによりテウセンフデガヒの利用は、頗る妙なりといふべし。

▲貝の化石　陸前國氣仙郡は化石にも富める所なるが、近時發見せる貝類化石を報ぜんに、中白部堊紀のものに *Perna* sp. あり。氣仙郡末崎村に產す、この物宮城縣本吉郡大島及び上州神ヶ原のものと同一なりと、又三角貝卽ち *Trigonia pocilliformis* Yokoyama. をも產す。前記大島及び上野、下總、信濃、土佐、阿波、淡路、紀伊等の白堊紀にも產すと、同末崎村には *Cucullaea* sp. 併に俗に蓮華石と稱する *Astarte* sp. をも多量に產出す。この他種々の腹足類に富む。又本郡矢作村なる二疊紀の地層には *Aviculopecten* sp. を產す。又侏羅紀のものと思はるゝ *Ammonite* sp. は後來注意研究物なるべし。以上は東北帝國大學の矢部博士の鑑別を煩はせる所に係る。

▲兒童と貝　各地の兒童の玩弄の貝類と其の遊戲法とを調査せば、面白きものあるべし、余は臺灣在職中、見聞せるものは、臺灣沿海地方に住する

臺灣人卽ち支那移住民の兒童の中には、ハナマルユキ、ハチヂヤウタカラ等の一端に孔を穿ちて絲を貫き頭にかけ弄ふ由なるも、實見の由なく只貝を得たるのみ。又臺灣南方の地にてもマドガヒの厚き老貝を正圓形に切りて一端に穿孔して、珍重するものなるが如し。マドガヒは臺南附近なる安平地方には其の淺海に多產す。幼貝は透明にして美なれど、老貝は稍重厚となり黑く染む。

▲子ヂヌキバイの臀　子ヂヌキバイ *Chrysodomus pericochlion parallelus* Dall は、當地產の珍貝の一なるが老貝は、長さ四寸に達し、殼口雪白頗る純潔なり。されど老貝は極めて稀なり。此種は沿岸を距る十餘里の海洋にて三百尋の深海に產す。貝の臀の損せぬものは殼口より長きを以て、不釣合の觀あれど、動物の殼內に入るに當りては、斜に臀を引き入るゝ習性あるものゝ如し。

奇拔なるマテガヒの漁獲具

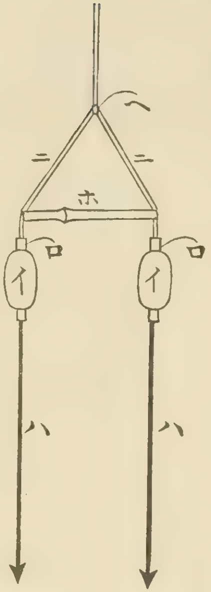
舞子　H　O　生

マテガヒの面白き習性を有する事は諸君の旣に御承知の事であらうと思ふ。此貝は採取の困難なる爲め我等の膳に上ぼす事が出來なかつたのであるが余は當地へト居せし以來明石の西方に饒產地が有つて時々貝を賣りに來るので。初めて二三年前に買求て味ふた事がある。序ながら調理法も述べて置かう。先づ剝身を一々よく臟腑を取りて水洗し二つ切りとし。酒醬油砂糖にて程能く加減し少許の刻生薑を加へ能く煮て食すれば味淡泊にして章魚に似て美味である。余は貝類中にて美味なるものは鮑を最としマテガヒは其次位であらうと思ふ。

次にマテつきの構造を大略圖解して見よう。長さ

六寸直徑一寸三分五厘計り上下鈍角を爲せる中空銑鐵製の錘(イ)を作り。直徑七分長さ一尺の杉材製の圓棒(ロ)を貫通せしめ。下端には直徑約一分二厘長さ二尺八寸五分下端鏃狀をなせる鍛鐵製の圓針(ハ)を縛り付け。上端には穴を穿ちて苧繩の外面を撚糸にて捲き附けたるもの(ニ)を附す。

第二圖



扨て右のもの二個を取りて圓棒上部の處を。直徑四分五厘位長さ一尺四寸五分兩端矢筈形を爲せる竹(ホ)にて兩方を張り。上方一尺五寸計の處(ヘ)にて兩方を合して一本となし其紐は長し。

産地にては十二月中旬より翌年二月に渉りて採取する。其方法は漁船一艘に普通四人乘組み。舳部に角石材の錘二個を海底に垂れ潮流に任せて徐々に下る。採取者は一人にマテつき十二條を一束にしたるを取りて絕へず上下に動かしつゝ海底を突立てるのである。マテガヒは砂泥中に直立して棲息して居る故。圓針(ハ)の爲めに貫通せられ。順次珠數繫ぎに串刺となるので有る。多き時は一人一日に七八貫目を漁獲すと云ふ事である。

エヒメボタル

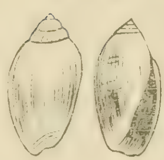
小松崎三枝

ホタルガヒの一種なるオリベラ・ビプリカタ *Olivella (Callianax) biplicata* Sowby は北米カリフォルニヤの特産なるに余は先年愛媛縣下北灘に

之を採集したり。

ホタルガヒ屬のものは介殼堅實にして表皮を缺き滑かにして光澤あり所謂陶器樣なるがビプリカタも此典型を逸せず、平滑にして美なる光澤を有す、殼形は一般ホタルガヒ屬のものと異り、圓柱形に近くして體層膨れ、椎實（しひのみ）形を爲せり。カリフォル

第三圖



ニヤ所產種にあつては長さ『〇、八乃至一インチ』を算すれども愛媛縣所產のものは椎實大に過ぎざるが故に幼貝ならざるやの疑を存したりしが蓋しローカル、ベーリエーション（Local variation）なるべし、殼色は淡紫朦朧にして縫合線褐色、螺塔淡褐色、綳帶は紫色を彩り、殼口內又淡き紫色を呈するが故に色澤と形狀とは佳麗なる調和を爲せり。

殆んど五千浬を距てて對立する我日本に本種を產するはファウナ（Fauna）上趣味深き事實なり。余は產地を紀念せんが爲之にエヒメボタル（愛媛螢）の和名を附せり。

蛤　考

村上信一郎

〇婚禮に蛤の吸物を用ふることは「むかし〳〵噺聞書」と題する寫本に「婚禮に蛤の吸物は享保年中明君の定め置き給ふよし、誠に蛤は數百千を集めても外の貝等に合はざるもの故婚儀を祝するに是程目出度物はなし、夫故の御定めなり、」とあつて蛤の貝の一つ〳〵に合せ目が異つて居て決して他の蛤貝とは合はぬものであるのを貞女兩夫に見ねざる敎訓的祝意に採つたものである、漢字に「合」の旁（つくり）があるのもよく此義に適つて居る、嫁入

の輿の前後に貝桶を相添へて持ちゆくのも蛤の吸物と同じ意義で明和九年刊の「女用文章糸車」にも「貝合（かひたほひ）の遊びは陰陽和合の表事にて片の貝をはなして外の貝に合し見れども千萬の中にて一つも逢はざる如く女も一度嫁入しては外の男に逢はざる掟に相適ふ物なる故外の道具は跡になれども貝桶ばかりは輿の前後に相添ふるなり、これ婚禮は陰陽和合の始めの壽なればなり」と誌してある、なほ貝桶のことは他日詳述する折りもあらう。

○住吉の浦（攝津）の忘れ貝といふのは之も蛤貝のことで「いとまあらば拾ひにゆかん住吉の岸によるてふ戀わすれ貝」といふ古歌がある、忘れ草（普通は萱草なれど住吉では水仙をいふ）に忘れ水と此忘れ貝とは歌道の秘事とすることと享保二年刊の「住吉名所鑑」に誌す如くである。

○禮記月令に季秋之月……爵（雀）入二大水一爲レ蛤とあるは飛物が氣化して潜物となるといふ支那一流の理學的謬見で雀貝などを見れば雀が化したと思ふのも一應無理ならぬことである、しかし蛤と雀とは餘り似ても居ないやうだ、孟冬之月……雉子入二大水一爲レ蜃とある蜃は大蛤ではなくて、蛟龍の屬の蜃である、卽ち蜃氣樓を吐くとの傳說ある蜃も大蛤にはあらずして蛟龍の屬であるのを俗書に蛤が蜃氣樓を吐いて居る處が描いてあるのは大間違ひだ、蜃には大蛤と蛟龍の屬との二種の解があるのを知らぬからの謬見である、勿論今日の物理學上から論ずれば蛟龍の說も何等の價値はないのであるが昔でいへば龍宮と蜃氣樓とは殆んど同一視せられて居たのである。

○蜃氣樓の海に幻出するを海市といひ湖上の蜃氣樓を湖市山間にて幻出するのを山市といふのであ

る、印度では帝釋天(たいしやくてん)の樂神なる乾闥婆王(けんたつばわう)が蜃氣樓を幻出するものとなし『自笑錄考』には『華嚴音義』を引て『西域名二樂人一爲二乾闥婆一彼樂人多幻二作城郭一』と書いて居るがその次に『輔行曰俗乾城曰二蜃氣一蜃大蛤也』とあるは前述の誤謬に落ちたものである。乾闥婆王は此に尋香王といひ、天龍八部の内に屬し或寫本に『健闥婆城大論六曰日初出時海洲蜃氣交映能現二宮殿男女出入諸相一日漸轉レ高樓閣轉滅只可二眼見一而無二實有一。私謂此是蜃樓也而與二健闥婆城一相似別也其尋香者在二香山間一而現如二西域記所一レ載』と論じて乾闥婆城は海市よりも寧ろ山市の方だと言つてある。

○蛟龍の屬の蜃はその脂を蠟に和して燭に作れば烟の中にも樓閣の形ありと迄傳へられどうしても蜃氣樓の本家元祖である、蛤と蜃氣樓とは何の關係もなく唯俗書に殘つて居るのみである、楊貴妃の俤を幻出したといふ五彩の還形燭は李夫人の反魂香にも似て何れも支那一流の妖術であるが蛟龍の燭も此類であらう。』

故アルフレッド・ヂョン・ヂユークスブラウン氏略傳

我同盟國の貝友ヂユークスブラウン氏は化石貝類學の大家にして現生貝類にありては特に蛤類の專門家なりしが歐洲の大戰亂勃發の際重病を發し病床に呻吟せらるゝこと六週間にして昨年八月十四日享年六十三歳にして溘焉長逝せられし由「タイムス」紙上に報せられ、大不列顛及愛蘭貝類學會雜誌上にコスモ・メルヴイル氏の哀悼文を見る。

氏は西暦千八百五十一年四月十六日英國ウォル

ヴァルハムプトン附近に生る、父はA・H・ブラウン氏、母はC・A・ヂユークス女史にして有名なる地質學者J・ビート・ヂユークス教授の妹にして「ヂユークス教授傳」の著者なり、氏は伯父の學統を受け地質學の造詣深く、晩年自巳の專門に關係ある現生貝類殊に瓣鰓類の研究に熱中せられたり。

氏は始めミッドルセックス州ハイゲートの有名なるコルメレイ校にて教育を受け、後ケムブリッヂにある「セント・ヂョンス・カレッヂ」に入りて博物學を修め、一千八百七十三年B、Aの學位を得同年アンドリユー・ラムセイ卿の下にありて大英國地質調査の臨時御雇となり、次で助手に進み勤續して千九百〇一年に及びしが健康勝れざるを以て已むを得ず辭職したり。

氏幼より虛弱なりしも精神旺盛にしてよく其蒲柳の質に勝ちて勤勉し、凡そ二十年前より跛となりて殆んご歩行すること能はざりき。

千九百〇一年地質學會々議は上部白堊層の岩石に關する氏の名著及學界に對する氏の貢献に酬ひんが爲めにムルチソン賞牌(メダル)を氏に授けしが八年の後(一千九百〇九年)氏は遂に學士會院の會員となりたり。

地質學に關する氏の著書は頗る浩澣にして百種に上り其出版せし教科書の如きも模範證典とせらるゝに至れり、今其主要なるものを擧ぐれば左の如し、

一、學生用應用地質學教科書、
二、地質學史教科書、
三、地層學教科書、
四、英吉利諸島の構造、
五、英國の白堊岩、

氏が現生貝類を研究せしは比較的晩年のことに

して瓣鰓類殊に淡菜類、蛤類の如きを其鉸鍱によりて分類したり今其主要なる論文を擧ぐれば左の如し、

一、淡菜科の屬の再査、

二、ポリ氏の屬名の應用、

三、白堊系及び第三系にある蛤類の屬に就て、

四、*Gomphina*、*Marcia*、*Hemitapes*、及び *Katelysia* てふ名の應用に就て、

五、*Petricola*、*Lucinopsis* 及び *Petricola* 科に就て、

六、ボルテン氏及びダコスタ氏が蛤類の屬に用ひし名稱に就て、

七、*Veneridae* (蛤類)の名目、

八、*Dosinia* 屬及其小別、

九、*Dosinia lucinalis* (Lamk.) 及其異名、

十、*Tivela* 及び *Grateloupia*、

十一、*Callista*、*Amiantis* 及び *Pitaria* に就て、

十二、*Clementia* の一新種、

十三、*Clementia subdiaphana* Cpr. に就て、

十四、所謂 *Gemma*、*Parastarte* 及び *Psephidion* に就て、

氏は亦貝類命名の問題に就て思を凝らし、多くの時間を費したり、例へばボルテン氏の目錄が出版年月早き爲め從來慣用し來れる名稱を廢して同氏の名稱を蘇生せしむるを嫌ひ痛く萬國命名規約の不都合を攻擊したり。

氏は不幸にして夫人及令息に先き立たれ、只一人の令孃と同棲したりしが最近に該令孃より其從弟と共に新西蘭に移住せらるべき報知ありたり。

余は氏と交ること已に數年屢々蛤類の標本を送りて氏の鑑査を乞ひしことありしが最近の倫敦軟體動物學會々報上に氏が多年專攻せし蛤類の分類

綱要の掲載せられしを見愉快禁ずること能はず直ちにて之を譯して本紙に掲載せんとせしに稿成りて訃報至るに會し哀悼禁ずること能はず卽ち此所に氏の小傳を掲げて吊意を表す、氏は自已の撮影を好まざりし由にて其風丰を窺ふに由なし、故に余は氏の發病一二週間前に認められし余の研究依賴に對する報告書二通を譯載して氏の研究振を偲ばんと欲す。

拜啓只今漸く御送附の蛤類の種名御報告出來申し候猶ほ御目錄中×符附きのものは四函に納めて御返送致し候、唯だドシニア（識別困難なるものにA・B・C・D・E等の記號を附し一まとめとして送りしもの）中には *japonica* 及び *pubescens* の二種有之識別の御困難有之間敷と存し候。甲は渦肋の數少なく、肋間には前後側共に細脈を刻し、鉸板極めて深きも、乙は肋數多く、肋間狹く、鉸板深からず、殼片の凸度變化多く、或は脹れ、或は側扁なるも、此等は唯だ地方的變異なるべく候。今回御返送致し候は側扁形のものにて、側扁なるが故に甲に類似致し居候。

ドシニアの第九號は *D. caelata* Reeve なるべしと考へ候しも模式標本と比較の爲めE・A・スミス氏に送り候處氏は該種に非ずして比律賓諸島より近着の標本と同一なるを發見し *D. subalata* の名稱の下に新種として記載せんと致し居られ候。

ドシニアの第十號は *D. juvenis* Chem. の極小種に候該種は比律賓緒島にては餘程大形に生長致し候間若しこれより大なる標本御發見無之候はば該種の矮變種となされ候て宜しかるべく候、

第十七號は *Pitaria virgo* Gray. 該種拜見相協ひ且二ヶ頂戴出來欣喜に不堪候、御考證の際御疑念晴れ候樣に念の爲め一ヶ御返送申上候該種の殼頂は必ず淡紅色を呈するものには御座なく往々全く白色に御座候。

第十八號は *Chione* (*Salacia*) *lamellata* var. *disjecta* にて濠洲種の一變種と相考へ候。

第十九號とせられ候二ヶの貝殼は別種の *Antigona* (=*Cytherea*, Dall non Lam.) にて、共に小生の *Periglypta* と名づけし區中に屬し候、其一は *A. chemnitzi* Hanley. 他（小さき方）は *A. crenata* Gmelin にて共に東印度諸島產として知れ渡り居候へども、これまで日本の如き遙か北方の國より發見せられ候事なかるべしと存じ居候今後若しクレナタ御手に入り候はゞ一ヶ御所望出來間敷候や。

御送附のタペス中二十號は *T. obscurata* Desh. に候、二十一號は *phenax* の一變種ならでデセイス氏の *T. similis* に酷似致し居候へども斷然該種なりとは決定仕かね候、二十一號aは皆 *phenax* に候。

ヴエチルピス中第五號は確かに *irus* ならで *mitis* Desh. に酷似致居候。第六號は比律賓產として記載されたる *macrophylla* Desh. なるが如くに相見へ候。其横肋が *mitis* のと異なる點を御注意被下度候。第三種なる第七號はヴエチルピス屬にはあらで *Petricola* 屬なるが如くに相見へ候。小生は之をスミス氏に送り候處同氏も之を見定め兼ね、大英博物館にも之れと類似のもの無之候由申し來り候間、其新種なることは明かに御座候若し同樣の標本御所持に候はゞ其中より二ヶ御送附被下度、小生は新種として

之を記載可仕候。

Petricola carditoides Conr. はペトリコラ屬中の模式區に屬し居候。

Rupellaria の模式は *P. lithophaga* にて亞屬にはあらで只の區に御座候。*P. lapicida* はペトリコラ本部 (S. S.) の模式に御座候。

イセシラカヒ科は未だ研究の暇無之も可成速かに着手致し結果御報告可仕候頓首。

一千九百十四年六月十二日

デュークスブラウン

（別に種名報告の表あるも之を略す）

拜啓御送附のイセシラカヒ科（ルシナ科）三種の報告漸く出來申し候。

ルシナてふ名稱は無齒の種に限られ、其模式は *L. edentula* に候、貴表の第二號は眞のルシナにて *L. pila* Reeve. ならんと存じ候。

第一號は *Phacoides* にて從來多數の著者等が大西洋產 *Ph. borealis* の東洋產一變種とせしものなること疑なく候へども委細の點に於て種々異なる處有之候へば別種と見做す可きものに候。

これは多分北米の西岸アラスカよりカリフォルニアに至るまでに產するものと同一種にて、デール博士は該種をリーヴ氏の *annulatus* と同一なりとせられ、貴下御送付の貝は *L. annulatus* に對する同氏の記載及び圖に酷似致し居候間之を *Phacoides annulatus* Reeve. と御稱へなされ候て差つかへ有之間敷と存じ候

ピルスブリー氏の *Codakia pisidium* と命名せる小貝はツキガヒ（コダキア）屬の模式部に屬せずしてデール博士が一亞屬とせる *Jagonia* に屬すべきものに候、然し實は *Linga* (Gabb 氏

の *Here*) 屬下に置かるべきデール博士の *Parvilucina* 區に屬すべきものと愚考罷在候。

パーヴィルシナが果して何屬に屬すべきかは今少しく十分にイセシラガヒ科の諸屬を研究せし後ならでは確答する能はざるも該貝を *Parvilucina pisidium* と呼ばれ候も不可なからんかと存じ候、然しパーヴィルシナは屬にあらずして只の區或は亞屬なることを御記臆被下度候。

小生希望の標本を保留することを御許し被下奉肅謝候。

今後數ヶ月間地質學の問題に沒頭致し度此冬に相成またイセシラガヒ科を研究せん積に御座候頓首。

先便御送付の二小貝は *Loripes icterieus* Reeve ならんと信じ居候、リーヴ氏は産地を記さゞるも該貝は同氏の圖に類似し又其短き記載とも符合致し居候、該貝は大島産と有之候。

一千九百十四年六月二十五日

トルクエー、アシヒル街、ウエストレー

にて　A・J・ヂユークス・ヴラウン

附言、歐洲大戰亂破裂後余は同盟國の成功を望む由を書き送りしが、此時氏は已に亡き數に入り居、氏が唯一の遺愛なるアリス孃より父の死去を報ずる答書來り氏が多年蒐集の貝類標本は全部オックスフォルド大學の博物館に寄附せられし由を附記しありたり。

其後また本年一月七日附の黑枠の書狀を受取りしが其中には亡夫の名を以て余が曩きに送りしクリスマスの贈物に對する謝辭を述べアリス孃は其從兄弟の一人と近々新西蘭に移住せらるべき由を報じ英國にありては此度の

戰爭にて多少の親戚或は友人を失はぬ者なき山を附記しありたり。

美之主貝科(文蛤類)分類綱領(一)

故A・J・ジュークス・ブラウン原著

美之主(ビノス)貝てふ名は余が *Venus stimpsoni* Gould に附けたる新名にして、Venus は英語にて「ビナス」と發音し、美を主どる女神なれば余は音義兩ながら取り、少し訛りて美之主(ビノス)貝と名けたり、而してベヌス屬の模式は *V. campechiensis* Gmelin, *V. kennicotti* Dall, *V. apodema* Dall, 及び *V. stimpsoni* Gould. の四種あるのみにして本邦には只 *V. stimpsoni* を産するのみなれば余はベヌス屬を「美之主貝屬」ベヌス科を「美之主貝科」と名づけざるを得ざるに至れり、我邦においては文蛤(ハマグリ)最も普通なれば文蛤屬、文蛤科と稱する方、一般に解し易きも如何にせん貝類學上不便を來すを免れざれば已むを得ずかく名づけしのみ、別に奇を衒ふてには非ず。

英人デュークス・ブラウン氏(A. J. Jukes-Browne, F. R. S., F. G. S.)は該國の學士會員にして、現生及化石文蛤類を蒐集研究すること八年、時々倫敦軟體動物學會々報紙上に其結果を報告せられしが一昨年十二月及昨年三月の紙上にこれ迄諸學者の承認せし文蛤類中の諸屬と諸亞屬との類緣及分類上の價値に關する意見を發表し、美之主貝科全體の分類綱領を掲載せられたり、余は本科最近の分類綱領を得たるの喜を讀者諸君に頒たんと欲し我「介類雜誌」續刊の初號より逐號其梗概を摘譯掲載することゝなしぬ、もと該綱領は屬を記するに留まれるに本邦產蛤類の種名をも加へ外國產の屬

の細説を省略したるは全く余の老婆心に外ならざるなり。

美之主貝科は瓣鰓類中の一大科にして、大抵三四の族或は亞科に分たれたり、即ちデセイス氏(Deshayes)の西暦千八百五十三年に發表せし分類には本科をドシニアナ(*Dosiniana*)、メレトリシアナ(*Meretriciana*)、ベヌシナ(*Venusina*)、及タペシナ(*Tapesina*)の四亞科に分ち、千八百八十七年フイスセル氏(Fischer)はメレトリシニー(*Meretricinae*)、ベ子リニー(*Venerinae*)及びタペチニー(*Tapetinae*)の三亞科に減ぜしが、千九百〇二年デール博士(Dr. Dall)は再びドシニニー(*Dosininae*)メレトリシニー(*Meretricinae*)、ベ子リニー(*Venerinae*)及びゲムミニー(*Gemminae*)の四亞科に分類したり、同博士はベネリニーとタペチニーとの區別を存す可らざるものとなせしが、余はドシニニーとメレトリシニーとの區別をも存す可らざるものと考へざるを得ず、其理由はドシニア屬とピタリア屬(*Pitaria*)との殼の差は極めて僅少にして其動物の差も多分極微なるべく、此兩屬はコスマン氏(M. Cossmann)と余との記載せしシノデイア亞屬(*Sinodia*)とコルディオプシス亞屬(*Cordiopsis*)とによりて互に相連絡すればなり、

デール博士はゲムマ亞科の胎兒がスフエリウム屬(*Sphaerium*ドブシヾミ類)及ピシディウム屬(*Pisidium*ミヂンドブシヾミ類)に於けるが如く外套腔内に保留せられ孵化せらるゝにより胎生として之を他亞屬と區別せるもペルセニール教授(Professor Pelseneer)の云へる如く「瓣鰓類中或種は抱卵の性あるにより一見胎生なるが如く見ゆるも世に胎生の瓣鰓類あることなし」とすれば同博士の說も正鵠を失せるものゝ如し、ゲムマ屬(*Gemma*)

バラスターテ屬（*Parastarte*）及びセフイデイア屬（*Psephidia*）の此の如く其幼蟲を保護するは頗る面白き事實なるも之によりて此等の諸屬が他の點にまで密接なる關係ありと結論するを得ざるのみならず他屬の發生も未だ詳ならざれば今日にありては此等の諸屬を關係親密なる他の諸屬より強いて分離するの必要なし、例へばセフイデイア屬の殼はゴムフイナ屬（オキアサリ屬）の殼に酷似し、ゴムフイナ屬の發生は未知に屬し或は其幼蟲を其外套腔内に保育するやも測られざれば余はゲムミニーを別亞科として承認することを能はず、故に余は本科を大別してメレトリシニー（ハマグリ亞科）及ベ子リニー（ビノスガヒ亞科）の二亞科となす、

余は本綱領を草するに先ち諸屬、諸亞屬の命名を決定するの要ありしも不幸にして然かすること能はず、若し嚴に先取權の命名法に從はゞ萬國共通命名規約を起草せし委員等の豫期せざりし多くの困難と不都合とを釀するを免れず、現規約の無理なる一例を擧げんにカリスタ（*Callista*）てふ名は已に人口に膾炙せる全屬の名なるに該規約によれば貶せられて下位の區名となりもと該屬中の一區名として提供せられしマクロカリスタ（*Macro-callista*）なる名稱は代つて屬名となり、眞の模式種を含める一群はチオ子ラ（*Chionella*）てふ名を冠せられ、これまで常に該屬の模式として世に知られたる現生種ベヌス・チオン（*Venus chione*）の代りに始新統（Eocene）の一化石を其模式とせざる可らざるに至るべし。

又若しボルテン氏（Bolten）の博物館目錄を科學的の出版物なりと認めて、之を先取權の規約より除外すること無くば該目錄中に掲げられたる名稱は最近百年以上採用し來しラマーク氏（Lamarck）

の名稱に代らざる可らざるに至るべし、然しボルテン氏の目錄は屬或は亞屬の説明を掲げざる非科學的のものにして、ラマーク氏の書は屬の適當なる定義と識別點とを掲げあれば此に代ふるに彼を以てするが如きは不正、不必要、又不便利を免れざるのみならず萬國動物學會議も亦先取權の規約に除外例を設け得るの議を可決したれば余はボルテン氏の目錄除外の宣言が一日も速かならんことを望まざるを得ず。

或人々は先取權の規約を嚴守せるも余は之に束縛せらるゝを好まず、故に余は從來効力を有せざりし西暦千八百五十二年發表のリーチ氏 (Leach) の異名を採用せずして千八百五十三年發表のメルヒ氏(Mörch)、及び千八百五十七年發表のアダムス氏 (Adams) の使用せしカリスタ (*Callista*) てふ名稱を續用すべし、余は又同一の理由によりてデール博士 (Dr. Dall) がボルテン氏の目錄より採用復活せしサイセリア (*Cytherea*) 及びパフィア (*Paphia*) てふ名稱を受け納るゝを欲せず。

余はまた本科の化石類の多分を屢々本紙に記載したればこゝには只之を適當の場所に置き簡短に其主要の特徴を記するに留めん、最古の屬はカリスタ、ドシニオプシス (*Dosiniopsis*)、シプリメリア (*Cyprimeria*)、フラヴェンチア (*Flaventia*) 及びバロダ (*Baroda*)なるが如し、此等の諸屬は皆歐洲及印度の白堊系に發見せらる、ピタリア屬 (*Pitaria*) は始新統 (Eocene) に見はれ、多分ドシニア屬の祖先なるべきもドシニアは漸新統 (Oligocene)に至るまでは出現することなく、それも只亞米利加洲にのみ限り、最古の歐洲産ドシニアは中新統 (Miocene) に現はる、併し其亞屬コルヂオプシス (*Cordiopsis*)は漸新統に見はる。

ドシニオプシス屬がドシニア屬に對する類縁は其カリスタ屬に對するよりも親密なりとは思はれざるも始新統產のメロエナ屬(*Meroena*)を介してスネッタ屬(*Sunetta*)と關係あるは確なりとす、メロエナはドシニオプシスが後縁の非常に扁平となりしにより後側歯を失ひしものと見るを得べし。

一千九百〇八年に余がフラヴェンチア(*Flaventia*)と命名せし貝に關しては余は猶ほクレメンチア(*Clementia*)を現生の最近代表者なりと思惟すれどもクレメンチア類はクレメンチアとサマランヂア(*Samarangia*)とに見はるゝ特性を合せし廣博にして分化の度低きものにしてベヌス屬(*Venus*)及びキオン(*Chione*)の祖先なるが如きも其連鎖は未だ發見せられず。

Sub-family **MERETRICINAE**(ハマグリ亞科)

Genus *CALLISTA* Mörch (after Poli).

(マツヤマワスレ屬新稱)

本屬の貝類はラマーク氏によりてメレトリックス(*Meretrix* = *Cytherea*)中に編入せられしものなるもメルク氏は千八百五十三年に亞屬として、アダムス氏は千八百五十七年に屬として之を承認したり

模式　*Venus chione* Linn.(一千八百七十六年にミーク氏の定めたるもの)

異名　*Chione* Gray, 1838 (Megerle氏に非ず)、*Dione* Gray, 1847 (Hubner 氏に非ず), *Chionella* Cossmann 1886.

殼は卵形或は長楕圓形にして平滑なるか、有脈なるか、或は渦肋を刻し、前丘は明瞭なるも後丘は判然たらず、左殼片の鉸鏁は強き前側歯と三主歯とを有し、其中前方の二主歯は頂部にて合一し後主歯は歯丘(Nymph)と合一す、又右殼片にありては二ケの前側歯と三ケの主歯とを有し、其中

前方の二歯は相近けり、右後縁は必ず溝を有し、左前縁は概して溝を具へ、以て斜截狀をなせる對縁に適合せしむ、腹縁は平滑（*Transenella*を除く）にして、足筋痕は狹長なる溝にて柱痕と連結せらる、

Section *Callista* s. s. （**マツヤマワスレ區** 新稱）

模式 *Venus chione* Linn.

殼面平滑にして假漆を塗りたるが如く、微細なる斷續放射脈を刻し、外套痕の灣入は廣くして水平の位置を占め、前方に尖り、右後主歯は狹くして淺溝を刻す、邦産に左の種あり、

C. erycina Lam. 大隅大島

C. semisulcata Sowb. var. 大隅大島

C. pacifica Dillw. **マツヤマワスレ**（日八）中部

C. roscida Gould. 肥前

C. chishimana Pils. **エゾワスレ**（岩川） 北海道

Section *Macrocallista* Meek (1876).

模式 *V. nimbosa* Sol. (= *V. gigantea* Gmel.)

殼は長形なり、

Section *Callistina* J.-Br. (1908).

模式 *Cytherea plana* Sow. (白堊系)

Sub-genera, (亞屬)

Lepidocardia Dall, 1902.

模式 *Venus africana* Phil.

殼は小形、側扁にして後方窄み、鉸鏁短く、歯密接せり

Transenella Dall, 1883.

模式 *Cytherea conradiana* Dall.

套痕の灣入圓く、殼縁は切線的に溝を刻す、

Tivelina Cossmann, 1887.

模式 *Cytherea tellinaria* Lam.

殼は小形、側扁にして、主歯皆短く、灣入は小

さく且つ圓くして上昇せり(始新統(エオシーン))、

Aphrodina Conrad, 1868.

模式　*Meretrix tippana* Conr.

主歯は廣く分支し、套痕の灣入は深くして上昇し、白堊系及始新統の化石なり、

Genus *AMIANTIS* Carpenter, 1865.

異名　*Dione* Gray, 1847 (1851に非ず)、*Dione* Römer, 1862、*Dione* Fischer, 1887、*Hysteroconcha* はリンネ氏前の名なり、

Section *Amiantis* s. s.　模式 *Cytherea callosa* Conrad., Sce. *Lamelliconcha* Dall. 模式 *Cytherea concinna* Sow.

Genus *PITARIA* Römer, 1857, em.

(**ウスハマグリ屬**新稱)

異名　*Caryatis* Römer, 1862.

殼は卵形或は亞三角形をなし、平滑或は細脈を有し、前丘は表皮的にして、後丘は判然たらず、左殼片の歯は *Amiantis* の歯に類似せるも後主歯は概して多少歯丘(ラムフ)より離れ、右殼片にありては兩外主歯は往々相合して中主歯上に弧狀を呈し、套痕の灣入は短くして圓く、右後及左前背縁は *Callista* に於けるが如くに溝を有し、收足筋痕は肉柱痕と相合せり、

Section *Pitaria* s. s. (**ウスハマグリ區**新稱)

模式 *Venus tumens* Gmel.

歯丘に縦脈を刻し、左後主歯は歯丘と合し、中歯は三角形を呈し、右主歯は相離れ、灣入は深くして尖れり、邦産一あり、

P. virgo Gray. **ウスハマグリ**(日八)　瀬戸内海

Section *Calpitaria* J. Br., 1908.

模式　*Cytherea sulcataria* Lam.

歯丘は脉を有し、左後主歯は一部分離れて鉸鍱

部を超へて擴がり、左主齒は三角形を呈し、右主齒は相離れ、灣入は短くして圓し（始新統より現代に至る）

Section *Pitarina* J.-Br., 1913.

（ユフカゲハマグリ區新稱**）**

模式 *Cytherea citrina* Lam.

齒丘は平滑にして左後主齒は斜にして全く離れ右殼片の外主齒は相合して弧狀を呈し、灣入は短く且つ圓くして上昇せり、邦産左の如し、

P. citrina Lam. **ユフカゲハマグリ**（平瀬） 薩南諸島及琉球

P. sulfurea Pils. **イワウハマグリ**（平瀬） 淡路

P. limatula Sowb. **マダライワウハマグリ**（新稱） 大隅大島

P. pellucida Lam. 薩南諸島、琉球及肥前

P. subpellucida Sowb. 薩南諸島

P. læta Linn. 大隅大島

Section *Agriopoma* Dall, 1902. 模式 *Cytherea texasiana* Dall.

殼は汚白色にして、齒丘は平滑なり、左後主齒は長くして一部分離れ、右殼片の外主齒は相合して完弧を作り、灣入は鋭角を有す、

Sub-genera.（亞屬）

Tinctora n. n., J-Br., 1914. 模式 *Cytherea vulnerata* Brod.

異名 *Callizona* J.-Br., 1913.

Callocardia A. Adams, 1864. 模式 *C. guttata* A. Adams.

Aphorodora n. n. J.-Br., 1914. 模式 *Callocardia hirtsi* Preston.

異名：*Leucothea* J.-Br, 1913.

Atopodonta Cossm., 1886, 模式 *Venus conformis*

Desh.

Genus *LIOCONCHA* Mörch.

（サラサガヒ屬新稱）

本屬は千八百五十三年メルク氏の *Circe* より分離せし所にして、フイスセル氏は千八百八十七年 *Meretrix* 屬の亞屬として之を揭げ、千九百〇二年に至りデール博士は屬として之を採用したり本屬は明かに *Circe* によりも *Callista* によく類似するが故に余は分類上デール博士の說に左袒すべし、而して其 *Callista* と異なる點は次の記載によりて知ることを得べし、

模式　*Venus castrensis* Linn.

殼は卵形或は亞三角形を呈し、平滑或は渦脈を有し、前丘は表皮的にして後丘は判然せず、鉸板（Hinge-plate）厚く、歯は *Callista* に類するも左後歯は長くして一部歯丘と分離せり、右後歯は全きか或は微溝を具へ、背緣は *Callista* に於けるが如くに溝を有す、外套痕には灣入なく、足筋痕は杜痕と連合せり、

本屬は少しく異りたる二群の貝類を含み、一は *castrensis* を模式とし、殆んど平滑なり、他は *trimaculata* を模式とし、細脈或は溝を有し、後端稍や延長し、斜形更に甚しく、*L. sulcatina* Lam. 及び *Dione philippiana* Hanley 之に屬す、

本邦產には左の三種ありて、何れも大隅大島より產す、

L. tigrina Lam.　**サラサガヒ**（丹浦）

L. sowerbyi Desh.　**チヤイロサラサガヒ**（新稱）

L. ornata Dillw.　**ヲミナヘシ**（六介）

Genus *SAXIDOMUS* Conrad. 1857.

（ウチムラサキ屬新稱）

ハマグリ亞科の一員としての本屬の眞位置は千

九百〇二年デール博士の確定せし所にして、其前側歯が前主歯に餘り接近せるにより餘分の主歯と誤解せられ、爲めに本屬は *Tapes* 及 *Venerupis* の附近に置かれたり、然れども本屬は他屬よりも一層 *Callista* 屬に類似し、皺殼と斜前側歯とを有せる日本產の *C. chishimana*（エゾワスレ）によりて幾分か *Callista* と連絡せり、本屬の歯式と *Callista* 屬の歯式との差は、*Dosinia* の鉸鍱と *Pitaria* の鉸鍱との差に類し、其動物は相密着せる長水管を有せりと云ふ、

本屬は現生種只三種あるのみにて、

S. nuttalli Conrad (=*aratus* Gould, 及 *maximus* Anton).

S. giganteus Desh.

S. purpuratus Sow. 是れなり、而して此三種は共に北部太平洋に產し南カリフォルニア州より北アラスカ及び日本に擴がり、時間上にありてはカリフォルニア州の始新統（エオシーン）に溯る、

模式　*S. nuttalli* Conrad.

殼は卵形にして渦狀皺脈を刻し、判然たる前後丘なく、後方少しく開き、靱帶は大形にして著しく、鉸板は狹くして曲り、歯は不規則なり、左殼片は一個の斜前側歯と狹くして密接せる三個の主歯とを具へ、後主歯は歯丘と離れたり、右殼片は二個の小前側歯と三個の主歯とを具へ其後主歯のみ溝を有せり、兩殼片の緣は平滑にして溝なし、外套痕の灣入は深く且水平にして、肉柱痕は大きく、足筋痕は不規則に肉柱痕內に開けり、邦產一あるのみ、

S. purpuratus Sow. **ウチムラサキ**（目八）

武藏、相模、淡路、瀨戶內海、丹後等

カタヤマガヒ(Katayama nosophora Robson.)に就て

G・C・ロブソン原著

所謂片山病の病源を宿せる淡水產貝類の學名に就ては屢々質問を受けしことありしも未だ該貝の記載を見しことなかりしを以て直ちに米國費府の貝類學者ピルスブリー氏に送付し至急に調査せられんことを請ひ置きたり、爾後數年何等の報告に接せず、余は大に失望し居たりしが、此頃英國ロブソン氏(G. C. Robson, B. A.)より本年一月號の「英國醫學雜誌」(British Medical Journal)に掲げられしライペル氏及アツキンソン氏の論文「亞細亞住血吸蟲の傳播に關する觀察」("Observation on the Spread of Asiatic Schistosomiasis" by R. T. Leiper, D. Sc., M. B., F. Z. S., and Surgeon E. L. Atkinson, R. N.)一部を送附し來りしが、其末尾にロブソン氏のカタヤマガヒに關する備考を添附しありしを以てそを本誌に譯載することゝなしぬ、」

ライペル氏の報告によれば灌漑用溝渠の兩岸に生する蘚苔、雜草及稻田中に饒生すと云ふ、然るに余はスミス氏(E. A. Smith)の援助により日本陸產及淡水產貝類の文獻を搜索せしも此貝の記載を發見すること能はざりき之れ余の頗る奇怪とする所なり、又出來得る限り支那の陸產及淡水產貝類に關する文獻を注意して研究せしも遂に之を發見すること能はざりしを以て已むを得ず之を新種とせざる可からざるに至れり、かく無數に產する淡水產貝類が實際記載せられざるは洵に非常の事に屬す、然し或は余輩の見ることを得ざる日本文

の記載あらんも未だ測る可らず且つ貝類學的の基礎に立てる解剖上の性質を知らずして他科に屬するものとして記載せられあるやも亦測る可らざるなり、されどそれよりも眞に近からんと思はるゝ解釋は此貝が此頃に至りてかく無數に繁殖せしならんといふことなり、スミス氏の余に語る所によれば *Paludestrina jenkinsi* が始めて英國に於て發見せられし時も多量採集せられ而かも英國産貝類の豊富なる記載中に之を發見すること能はざりしとぞ。

本種の系統上の位地に關しては保存せられたる材料解剖に適せざりしを以て此所に定め置きたる屬の位地は之を假のものとして本種の解剖上の性質が一層よく詳知せらるゝの日を待ざる可らず。

齒舌は牧師グワトキン氏(Rev. H. M. Gwatkin)の厚意を以て氏の蒐集せる種々淡水産貝類の齒舌と比較し、最もよく *Pyrgulopsis* に近似し、次に *Pechydrobis* に類似せりと思惟せり、只一個の齒のみを見れば他屬(例へば *Littorinida*)に比較す可きが如きも要するに總ての既知の屬と異れり。

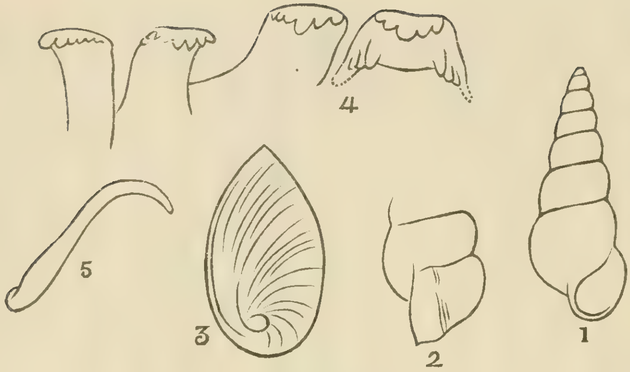
カタヤマカヒ屬新屬(**Katayama**, Gen. nov.)

齒舌、中齒は其底部に三個の齒狀小突起を有し其咀嚼面には大形の一中尖と兩側に二個宛の側尖とを具ふ、副中齒は大形にして著明なる一尖と五小尖とを有し　其次の齒は八尖を有し、又其次の齒は七尖を具ふ、此外側の縁齒の端が弓狀を呈せることは側面圖に見るが如し。

殼は八層を數へ(最上の二層は大抵浸蝕せらる)順次に增大し、其輪廓稍や脹れ、縫合著明にして全形は圓錐狀をなす、殼口縁は切込なく濃きチョコレート褐色を呈し、腹唇及内唇は厚くなりて反曲し、體層は殼口縁附近にて急に擴張し、其横走

生長線は肪狀を呈す、色は淡橄欖褐色にして、體

第四圖　カタヤマガヒ



1　正面　×４
2　側面の一部　×5.
3　臍の略圖×12.
4　齒の半列
5　第二緣齒.
(1,2,原圖;3,4,5,Robson ヨリ)

層は往々藁色をなし、頂部の二層は浸蝕作用を受けて暗紫黑色を呈す、殼質は角樣にして稍や堅く、不規則なる横走生長線ありて精細、且不規則の顆粒ある殼面を横ぎり、高度の鏡下に檢すれば注々曖昧なる螺線を見はす。

殼の大さ、最大の高さ八・五粍、最大の幅三・一粍、殼口の最大徑二・七五粍。

臍（第三圖）は螺旋し、螺旋の核は側位にして著しく一方に偏す。

カタヤマガヒ新種（**Katayama nosophora,** n. sp.）特性は屬の記載に同じ。

模式標本の產地、片山村（譯者註廣島縣にあり）の溝渠及稻田。

模式標本は大英博物館（博物部）內に藏せらる。

前文譯了後到着の「ノーチラス」五月號を讀むに「ブランフオルデイア屬（ヲカマメタニシ

屬）の日本產諸種」と題したるピルスブリー博士の一文あり、同博士はカタヤマガヒを新種として記載せられしも該紙出版前にロブソン氏の記載を一讀せられしかば其新名を撤し、*Blanfordia nosophora* (Robson) として發表せられたり、然れどもロブソン氏がブランフォルディア屬の位置に關する前人の記載に誤られて本種を新屬とし、「カタヤマ」てふ新屬を設けしを非難し、明かにブランフォルディア屬中のものとせり。

フイスセル氏及トライオン氏はブランフォルディア屬をトランカテラ科(クビキレガヒ科)中に編入せしも(貝類手引草四十六頁參照)ピルスブリー博士は肉體解剖と齒式とによりて之をアムニコラ科(和名未定)に轉籍したり、同博士の記載は他日稿を改めて譯載することあるべし。

雜録

平瀨貝類博物館

設立。館主が貝類博物館設立の趣旨を本誌第一卷第十一號に發表したのは明治四十年十一月の事であつたが拮据經營の効空しからず、大正二年三月二十二日希望は遂に事實となつて京都岡崎動物園の南方、風光明媚、交通便利の地に該館を創設することが出來た。

建築。本館三階建洋館五十二坪、東西十二間、南北三間、階下三十六坪の廣間を陳列室とし、九坪の隣室を販賣部とし、二階西部十八坪、中央の十二坪も陳列室で、後者の中央に休憩所を設け、北には疏水、動物園、商品陳列所を隔てゝ比叡の秀峰、黑谷の尖塔、應天門の丹碧を眺めることが

出來、南は百花咲き亂れたる後園を隔てゝ東山の翠巒が目睫の間に迫つて都ホテルや智恩院の屋根などが隱見して居る。二階の東部九坪は兒童博物室で三階は物置、建坪二十二坪の附屬館は上階を館主父子の研究室及應接間とし、下階を事務室及標本貯藏室としてある。

開館式　は雪降の中に天幕の中で行はれ、京大の諸教授、市の名譽職、其他の同情者百五十餘名來會せられ館主の本館設立の始末は大に來會者の同情を惹き之に次で大森知事、久原京大總長の祝詞代讀、市長代理加藤助役、原田同志社々長等の祝辭があり、文科大學教授松本亦太郎博士は「博物採集が人心に及ぼす効果」てふ題下に約一時間に渉りて趣味ある講演をせられ、又東京よりは丘理學博士、田中理學士等態々來會せられ殊に田中學士は熱心なる祝辭を述べ、又翌日有益なる講演を試みられた、

陳列、委細は別に「平瀨貝類博物館案內」てふ小冊子を出版して居るから就て御覽を願ふことゝし、ほんの一般を申すと下階廣間の窓下にある二十四函と中央の二函とには本邦產分種標本海產及淡水產の卷貝二枚貝等約二千餘種を最新の分類法に從ひ系統的に陳列し、外に陸の貝が千種ばかり外國產が約七千種ばかりあるけれども陳列の塲所がないからほんの少しばかり上階に幷べてある、四壁には貝類の生態圖、圖案、分布圖等を揭げ棚には貝類利用品を陳列し、中部の箱には浸液、透性、群生、寄生、共生、保護色、擬態、變異、連續、有益、有害、穿孔、畸形、養殖、發育順序等の各種參考標本等を陳列し、上階には伊太利式彫刻を始めとして切貝、磨貝、摺貝、貝鈿、眞珠、螺鈿、內外各種の貝殼利用品、貝形應用の陶磁器

木器、漆器、金屬器等より內外の珍貝、奇殼、化石、貝覆の貝、貝桶、迷信の貝、愛翫用貝、貝飾を着けたる蕃人の胸像、水族飼養器等に至るまで凡そ貝に關する者は盡く網羅し、上には明治天皇陛下御製の和歌當代和洋諸名家揮毫の貝圖等を額として揭げ、壁間には世界各國の貝類學者の肖像、貝覆遊戯の圖等を飾り、館外の鐵柵、外面及入口の壁より館內の衝立椅子、團扇茶器其他の器具菓子等に至るまで苟も介館の物とし云へば盡く之れ貝盡ならざるは無い。然るに休憩所に据付てある投書函中に日々投込まるる投書を讀んで見ると大抵は褒めてあるが、偶まにはやれ釦が無いの、やれ眞珠がないのと小言を言てあるのもある、して見ると函一ぱい並べてある數百の各種貝類の各種眞珠も、大きな額と數ヶ所に並べてある各種貝類の各種釦も或人の眼にはとまらぬかと思ふと洵に情なくなる。

東宮殿下、迪宮、高松宮二皇子殿下の行啓、大正二年三月三十一日、實は聖上猶ほ東宮にて渡らせられた頃、皇子方への御土産として當介館蒐集の貝類を御持歸りになつたこともあり、松平子爵等からも献上になつて居り、當館發行の書籍等も御手元に届いて居り、貝類の御研究には多大の御趣味を有せられ、所々にて御採集の貝類も少なからぬ由承はつて居る、館主が明治四十四年七月少しばかりの貝類標本を携へて東上し、文部省、內務省、華族會館、宮內大臣官舍、農商務省、學習院等に展覽した折にも台覽の光榮を荷ふたが、再び開館旬日の後に三殿下の行啓を辱ふし、樓上の御休憩所で館主父子に拜謁仰付けられ、大森知事及館主の先導にて御熱心に隈なく觀はせられ、殊に東宮殿下には貝類に御精通あらせらるゝ御模樣

にて御下問に相成る事、中々斯道の研究者も及ばぬ程で常陸帶、太角貝、紋摺、撞木蠣等に就き御質問或は御説明があつた、猶ほ館主は綺麗な貝類十二種入三箱と殿下の御目に留つた太角貝とを獻上したが、篤と台覧の上珍らしいと讚はしたのは先づ六七種位で他は悉く御承知になつて居たので一同は大に恐懼した、翌四月一日早朝、館主は二條離宮に參じて御禮を言上したが三殿下には甚だ御満足あらせられたる趣を傳へさせられ且つ多分の御下賜金を頂戴した、二十五年有餘心血を濺いで此事業に熱中した館主の面目此上も無き次第である。

世界一周貝類展覽會、大正二年八月十日より三十日間、館主が過去二十五六年間に世界各國の貝類學者、博物館と通信して或は購求し、或は日本の特産や新種と交換して集めた外國産の貝類は六七千種もあつて本邦産の二倍以上もあるが平素は之を陳列する場所がない、そこで折々邦産分類標本を徹して其代りに外國産を陳列する樣にしてある、然し外國産の方は系統的に並べるよりも世界一周旅行の道順に並べ、更に單調を破りて老幼婦女子等の注意を惹き、幾分にても世界的智識を與へんが爲めに各國の風土人情を略記して各部に掲げ、其上に各國固有の玩具、人形、器具、産物、寫眞等を配列し其背景に各國特種の風景を畫かせた、内外多數の諸名士及び同情者の出品と寄贈とにより此餘興陳列を賑やかにすることの出來たのは深く本館の感謝する所である。

さて其陳列の概略を述べんに朝鮮の陸貝は支那とよりも日本内地との共通種が多く、滿洲も亦陸貝、淡水貝共に日本内地と略ぼ同一である、それから西比利亞鐵道の便を借つて露領中央亞細亞を

通り裏海に至る、裏海は日本內地程もある鹹湖であるから其貝類は無論海產式で淡水には決して見る可らざる羅貝類等をも產する、カフカス地方、クリム半島、瑞典、那威を經てスピッツベルゲンに赴き、丁抹に渡り、獨逸に入り、墺匈國に下ると、我國に似てキセル貝(左卷)の種類が多く、往往右卷の標本もある、更にバルカン半島に下り、伊太利に渡り、サルヂニア、シチリア、コルシカの諸島から佛國に入ると諸種の蝸牛を食用に供するので有名である、英國は萬事我國に優つて居るが只貝類の種類の多いことだけは兎ても我國の足下にも寄り附けぬ、西班牙、葡萄牙を經て、地中海を採集すると筆貝類の一種ミツラ・ゾナタの如き稀品もある、北部亞弗利加の貝類は南歐式である、西部亞弗利加には土人の崇拜する左卷陸貝アカチナ・ビカリナタ、世界最大陸貝の一なるアカチナ・アカチナ等がある、南部亞弗利加には我琉球的の海貝が多く、東部亞弗利加の諸大湖の淡水產貝類中には往々海產式のものを含み、陸貝にも亦珍いものがある。

再び亞細亞に引返して亞刺比亞に至ると、陸貝は大抵砂漠的である、小亞細亞シリア地方の貝類中には「巡禮紀行」の著者德富蘆花君や、猶太の古跡を歷遊された小西增太郎君から貰つた貝類もあつて基敎信徒諸君の感興を惹いた樣である、眞珠で名高い波斯灣、亞弗利加大陸と生物を異にするマダガスカー島、英領のモーリシアス島をも見落さぬ樣にして印度に至ると迷信のシャンク貝がある、トラヴァンコール國の徽章となり護持佛毘漆奴の必携品となり、其輪切した物は印度婦人の腕環となり、殊に左卷のシャンク貝は同重の黃金と交換さるゝ程貴重されて居る、印度洋からは深海

産のものが多く、新嘉坡産の海貝は概して琉球式で、東京産のキセルガヒ類は佛國の貝類學者バベー氏の研究寄贈にかゝるものである、支那の陸貝は本邦と大同小異で、本邦で稀品の中に數へらるゝ大絲掛、芭蕉貝等も香港邊では比較的に容易く求め得らるゝ、支那海産には都法螺類の珍種もある、比律賓諸島は海陸産貝類の豐富と彩色の美とを以て有名である、東印度諸島と濠洲との海は概して南部日本式で、木曜島の蝶貝、クインスランド州の曲つた大窓貝と大芋貝ヴイクトリア州の黒蝸牛等が最も著しく、又常陸帶の種類が多い、三角貝の化石は百種以上もあるが現生種は僅かに五種で、盡く濠洲産である、新カレドニアには殼の長い蝸牛が多く、土人は一種の口紫海兎類を尊重するから、該貝は一磅位の高價で賣買されて居る。

布哇は久しく我大阪に在住して居つた米國宣教師ヂョン・ギユリキ氏の故郷で、同氏は放射狀をなして居る該島の谷々から陸貝を採集比較研究してダーウヰン説の缺點を發見し、英國のロマネス氏と共に生理的進化説を唱へ、近年又「カーネギーインスチチユート」から部の厚い進化論の本を出版したが本會に陳列された美麗な布哇産陸貝は大抵同氏の寄贈にかゝるもので進化説の論證に引用された貴重な標本である。

南米産としては巴西の世界最大の蝸牛、ボリビアの淡水産アムプラリア(大田螺の類)等が珍らしく、西印度の蝸牛にはカタマイマイ的のプリユロドンテ屬が多い。

米國は淡水産貝類が豐富でユニオ(烏貝の類)の種類の多いとは世界總種數の半分を占めて居る、海産には左卷のフルグル、貝細工に用ふる青鮑、赤鮑、世界最大のヒザラガヒ等が著しい、東方海

上のバームダ諸島は英領であるが貝類は米國式である、加奈陀からは諸大湖諸大河の淡水産貝類が陳列されてあつた。

貝類圖書陳列會、大正二年十月二十四日より十日間、一口に貝の本と申すと幾何もあるまいと思はるゝけれども專門に調べる段になると手のつけ樣のない程澤山あるものである、先づ邦文では寫本に武藏石壽著「目八譜」二十冊、畔田翠山著「介志」六冊、「淨貞五百介圖」一冊、「六百介圖」七冊「群分品彙」一冊等、版本に畔田翠山著「古名錄」卷五十七より卷六十迄介部四卷、「貝盡浦の錦」二冊等を始めとして數十部、外國書ではトライオン氏の貝類學三十七冊、キーチル氏の貝圖六冊、リシケ氏の日本海產貝類學三冊等を始めとしてコベルト、シユレンケ、ワトソン、スミス、ドーチヤンベール、セツプマン、クツク、フイスセル、ソーワービー、ローチエルス諸氏の書及雜誌小册子等陳列の場所なかりし爲め僅に其一部を出陳した。

貝類斷面圖案展覽會、大正三年一月三日より二週間、館主は曾て種々の貝殼を縱橫無盡に切斷して研究して居られたが其斷面が如何にも奇妙なので試みに其斷面に印肉をつけて白紙に捺してみられた所が頗る面白い圖案が出來たので貝類博物館開館の月に「貝殼斷面圖案」第一輯を出版せられたが、其後該圖案の應用漸々範圍を廣めた結果遂に本會を見るに至つた、其範圍は陶磁器、木漆器、諸種の織物、唐紙、欄間(らんま)、袋物、燒繪、團扇、扇子、麥稈細工及び室內裝飾什器等諸種の圖案等より菓子等に至るまで殆んど枚擧に遑なく、實物の貝殼斷面標本をも陳列してあつた。館員西川純二氏の本會に對する盡力は實に少くなかつた。

文蛤展覽會、大正三年三月二十二日より一ケ月

間、これは貝類博物館創立一周年記念の爲めに開いた展覽會で當時館主の配布せられた目錄の緒言中に左の如き文句がある。

「文蛤を撰んだのは別にむつかしい理由があるではない、蛤は貝類中最も普通なもので時は恰も三月雛祭の頃に當り、雛の貝桶、雛の椀など幾分か蛤との關係もあり、且つ汐干狩に最もよろしい頃とて自然、蛤の思ひ出さるゝ時節且つ不思議に本年は高知の海に江戸土産の蛤を放養した南海の偉人野中兼山の二百五十年忌にも當るし、また自分の宅は御所の蛤御門前にあるので、當博物館の卵は蛤御門前で孵化したと云ふても差支へはない………」

而して其主なる出品物は左の百餘點であつた。

生きた蛤、蛤の解剖、蛤の眞珠、目八譜所載蛤十二種、成長順序、紋變り、貝塚の蛤、各地の蛤、鑵詰、乾肉、佃煮、時雨煮、エキス、スープ、桑名燒蛤、龜山蛤辨當、香盒、蛤粉、貝覆の貝并に貝桶、同雛用、雛椀、手鞠の核、文字貝、富貴貝、重ね蛤、はじき貝、切張り貝、錦蛤、がら〳〵、蛤形及蛤模樣の陶磁漆木金屬諸器、根付、刀劍小道具類、繪鏡、ピン、錢入、蛤及蜃氣樓等圖案の諸織物、諸紙類、團扇、扇子、菓子、并に蛤に關する圖書、寫眞、額、看板、諸家紋、詩歌俳句等

刊行の圖書類、

「貝殼斷面圖案」第一卷（前述）

「貝千種」第一輯及第二輯（絹表裝、折本、全部木版極彩色畫、收むる所大小二百種）

米國アガシズ學會發行の雜誌「ガイド、ツ、子ーチユア」本年二月號は本館發行の「貝千種」第一輯を評して云ふ「此無雙且つ絕妙の書は著作に關す

る日本的技巧と美術的趣味との一好標本なり、其製本美麗にして絹布を用ひ、圖書は精巧を極め、日本にては普通なるか知らねど頁數のつけ方の非凡なるも亦面白し、夫れ日本人は天然を愛す、其愛の一部溢れて興味津々たる此一書となる」と

又同國ボストン府博物學會々長ジョンソン氏は貝類專門の月刊雜誌「ノーチラス」紙上に同書を評して曰ふ「本書は日本風に表裝したる二重折の二十圖版中に九十五ヶの美麗なる彩色圖を含み總して設色描寫共に絶好にして、オホヤマタニシ、ニシキヒザラガヒ、ヤミノニシキ及び稀有にして華麗なるベニオキナエビスの如き近時公にせられたる種類を書けること多く亦無雙の貝書たるを失はず」と。

「貝類博物館案内」(圖版八枚、紙數九十頁)小冊子なれども多く六號の細字を用ひ四篇に分ち第一篇分類標本、第二篇參考品、第三篇利用及應用品、第四篇雜となし、前に掲げけた博物館陳列の内容を細說したもので殊に第一篇は僅か二十六頁の中に貝類分類の大綱を掲げ、一々注意すべき種屬を指摘してあるから、唯だ之を通讀した丈けでも貝類學の大意を了解することが出來やうかと考へられる。

「普通貝類の栞」、本書は嘗て發行して今は絶版となつて居る貝類手引草の改版とも見るべきもので二十二種の中等教育適用動物教科書に掲げてある七十餘種の貝類を根據とし其參考として必用と思はるゝ種類を加へて約二百種を稍や詳しく、しかも面白き事項を澤山加へて說明してあるから中等諸等各種學校の教授用及び生徒の參考用に適當で教育に關係なき讀者に對しても必ず貝類に對して興味を惹き起すことが出來やうと信ずる、昨年十月十二日大森京都府知事は京都府教育會長の資格

を以て各府縣の教育會宛に普通教育用貝類標本」と本書とに對する推薦狀を發せられ全國の各學校に之を推奬せられた。

此外「日本產貝類圖說」等は續々刊行の積であるが「貝類手引草」が最早賣切れたから其代りに近刊の積であつた「日本小貝類學」は本誌の附錄として分刊することにした。

維持方法、館主が貝類研究に從事せんと決心せられた際、親戚の甲乙は非常な不賛成を唱へて諫止したさうである、元來分類學位割に合はぬ學問はない、日本中の貝類を隅から隅まで調べ盡してやつと分布の有樣がわかる、而して其調べ盡すと云ふことが到底不可能の事で、又莫大の費用を要する、陸上の貝類を採集するにも非常の困難が伴ふものである、まして海底の採集などは決して思ふ樣にはならぬ、館主が三十年近くの間千島、朝鮮琉球、小笠原、臺灣、その他全國各地に採集者を派遣された費用ばかりでも決して少くはない、それに全國各地の特別採集者より送り來る標本に對して支拂はるゝ額も頗る多い、其上「介類雜誌」刊行の爲ばかりでも數千圓以上の損失をせられて居るあれやこれやで家產の過半を失はれたから、家計上これ以上の失費を許さぬ然るに館主が貝類博物館創設の主意を公にせらるゝや京都市會では之を賛助して敷地を無料で貸與せんとの議があつた、又米人某々氏から建築費の大部を寄贈せんとの申込もあつた、所が愈よ事業に着手する間際に二つながら中止となつたけれども館主は萬難を排し、其家產と心血とを傾け盡してこゝに貝類博物館の開館を見ることが出來た、然るに當然これが維持費たるべき大人五錢、小人三錢の入場料と貝殼利用應用品等の僅かの賣上高とでは該館に使用して

居る人々の給料を仕拂ふにも足らぬ、敷地の買收、博物館の建築、器具及參考品の購入等に已に數萬の私財を擲つた館主は此上平然として貝類研究に沒頭して居る譯に行かぬ、館の維持經營にも奔走せねばならぬ、生來餘り强壯でない館主は內外多難苦慮焦心の折柄不幸にして昨年六月頃から膽囊炎と云ふ重症に罹られ病苦の間にも百方良策を講じて居られたが、歐洲の大戰亂は勃發する、獨墺との通信は杜絕する、英佛米の同情者等も亦東洋の一博物館の事など考へて居られなくなる、館主の資產上にも色々の打擊が來る、經濟界は不振となる、日獨戰爭が始る、長さ二三尺の礫を最大とし粟粒の四分一にも足らぬ概して見榮のせぬ貝類館は顧みられなくなる、なぜこんな贅澤な物を賣飛ばして軍事費に寄附せぬかとの投書さへある、事每に館主の胸にひしひしと迫る事ばかりである病蓐に呻吟せらるゝこと數ヶ月の後。幸にして健康が快復したから十一月に入つて東京に上り、豫て厚い同情を寄せらるゝ人々に貝類博物館の現狀を訴へ篤志家の援助を得て維持法を確定せらるゝ考であつたが滯京中復た病氣にかゝり萬事を東京の友人に托し充分希望を達せずして京都に歸られ爾來書狀にて交涉を重ねて居られたが本年二月中旬より膽囊炎が再發して維持法の劃策はもとより雜誌や圖書の發刊等萬事後れ勝になつたけれども幸にして此度は昨年程の重症でなく一陽來復と共に漸々元氣も恢復せられ甕れて已むの覺悟で事に當つて居らるゝから有志の諸君は館主の微衷を察し一層の同情を賜はらんことを切に願ふ次第である、外國等の例を見ると此の如き獻身的の事業は多くは國立、公立で左もなければ皇室か、富豪かの補助を受けて居る、世界各國共に多くの貝類學

者があり、貝類陳列の設備もあるが、大抵は大學の標本室か博物館の一部を使用して居る、式はセルハウスと唱へて富豪の貝盡の家などもあるが貝類專門の博物館はない樣である、京都にも古物を集めた帝室博物館はあるが、他に博物館はない、二十世紀の今日、東洋の文明國と誇つて居る我日本中央の舊都に眞正の博物標本を集めた博物館がないのは何となく寂しい樣である、平瀬貝類博物館は外觀は偉大でないが內容は頗る豐富である、而して我海國の豐富な動物界の一部を代表して居る、世界各國の所產をも一瞥の下に集めて居る、具眼の士は必ずや我博物館を以て都名所の一に數ふるであらうと信ずる、觀光外人も漸々爾か認めつゝある、米國ピィボディ博物館長の如きも「若し京都市が貴館を以て世界唯一の貝類博物館として認識するに至らば市の誇りとして貴下を援助するに至るべし」と申して居る、目下東京理科大學に動物學專攻中の子息信太郎氏も卒業後大に貝類の研究と博物館の發展とに盡さるゝ積であるから焦眉の急は內外に多數の同情者、後援者を得んことである。

本年二月の「ガイド・ツ・ネーチュア」は我貝類博物館に就て左の如く記して居る

「天然物採集中にありて貝類採集程面白きものは他にこれあらざるべし、貝類は啻に其美を以てのみならず又科學上興味あるを以て萬人の注意を惹き、有名なる博物學者の貝類採集より入門せし者亦尠からず、日本、京都、烏丸の平瀬氏は本會の會員にして數年前に入會せしが(中略)今は一大貝類博物館を有し全世界に貝類を供給するに至れり、歐洲の大戰亂勃發以來、日本も戰爭に參加し、人々亦貝類を樂しむの餘裕なく、歐

洲に於ける氏の庇護者も自然注意を他に轉ずるに至れり、故に吾人は戰地以外に住して貝類を愛する人々が同氏に貝類を注文せんことを希望す、氏は只自己の利を求めず又他人を益せんとの考を以て稱讃す可き事業に熱中せり、氏は商人に非ずして素人なり眞正の賞翫者にして天然に對する氏の見解は其正鵠を過たず、同好の諸氏多少に係らず氏に囑する所あれ」

昨年十二月號の「ノーチラス」紙上に揭げられたるピルスブリー博士宛のフレッド・ベーカー氏の書狀中に左の如き記事あり、

「京都にて余は平瀬氏に書狀を出し午後訪問しても差支なきやを問合せしに直ちに懇篤なる返書を得たり、平瀬氏は余と同齡位に見ゆる有髯にして立派なる上品の日本紳士なり、喫茶懇談に半時間を費やせし後、平瀬氏と其助手とは凡二時間ばかり余に其陳列品を案內したり、陳列貝類の種及變種の數は約一萬に上り、內日本產三千、外國產七千、陳列品は綺麗に飾り付けられ、各種に學名、和名、備考等を記せり、氏は日本人なればにや其配列は該國內の他の諸物と同じく矢張美術的にして之を通觀するに室に愉快なり、場所を吝まずして美觀を保てるが故に日本產以外の物を陳列するの餘裕なく只僅少の外國產貝類を陳列せるに過ぎず、平瀬氏の話によれば年數回函を置き交へて數週間宛陳列替をなすと。

余は一々之を細說するの暇なきも只二三の著明なるものを記すべし、一所には陸貝諸種がこれと云ふ境界なく相連續せるを示さんが爲めに數組を適宜の別に配布せること恰もヘムプヒル氏が *Helix strigosa* 群に施せるが如し、又他所

には全函に畸貝を並べ各完全なる同種の標本を附したるありて其中に二列の穴を有せる大形の石決明あり、更に著明なる畸貝もあり、又稀品の中には翁戎類の一組ありたり。

大東島の陸產貝類

大東島は沖縄島の東より百五六十海里、小笠原諸島の西四百海里の太平洋中にある孤島であるから交通が極めて不便で、只年に一二回宛鳥糞等を採集する爲めに小さな帆船が往來するばかりである、此島に產する陸產の貝類は琉球よりも寧ろ遠い方の小笠原に似て居て、此度大鹽重太郎氏から本館に送つて來たものは左の諸種であるが多くは新種であつて未だ何所にも記載されたことがないと思はれる。

Mandarina sp.
Eulota hachijoensis Pils. var.
Clausilia (*Zaptyx*) sp.
Succinea sp.
" sp.
Macrochlamys (?) sp.
Sitala sp.
Zonitoides minuscula Binn.
Tornatellina sp.
" sp.
" sp.
Elasmias sp.
Tornatellides (*Tornatellaria*) sp.
Bifidaria armigerella Reinh. var.
Nesopupa sp.
Carychium sp.
Omphalotropis strictus Gould.
Acinella sp.

貝類學名調査規定

貝類の學名調査を請求せらるゝ諸君は左記の件々承知せられんことを希望す。

一標本完全にして産地の判然たるものに限ること

一當舘の事務頗る繁忙にして其の餘暇に調査することなれば回答延引することあるも催促せられざること若し催促せらるゝ時は未調査のまゝ返送することゝ。

一標本の返送を要するものは返送料金を送付せらるゝ事。

一調査料として三十種まで一種に付五錢三十種以上一種に付四錢の割にて標本と共に先納せらるゝ事。

一なほ分類上に關する質疑等は事の長短により相當手數料を申受くるにつき豫め照會せらるゝ事

大正四年八月一日印刷
大正四年八月五日發行
（定價金貳拾錢）

不許複製

發行兼編輯者　京都市上京區烏丸通下長者町上ル龍前町十四番戸　平瀨與一郎

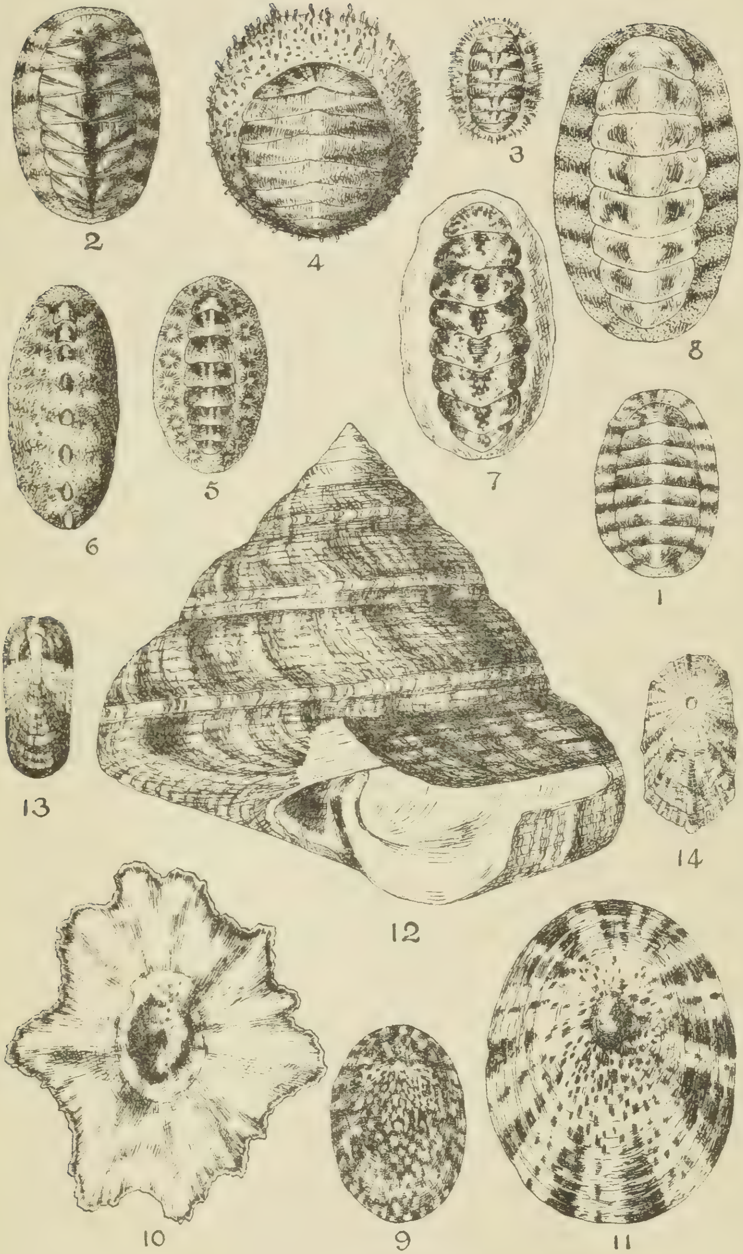
印刷人　三上庄治郎

印刷所　京都市下京區柳馬場通三條南入槌屋町　似玉堂印刷所

發行所　京都市岡崎町動物園南　平瀨介舘
電話上四一七二
振替東京一二〇五二

（本誌の定價に就て豫約者諸君に告ぐ）本誌豫約募集の際、定價拾五錢と廣告せしも單行本として出版の筈なりし「日本小貝類學」を附録せしにより頁數挿圖を增加し、物價騰貴の今日遂に定價を金貳拾錢に引上ぐるの已むを得ざるに至りたれば茲に事情を陳して豫約者諸君に謝し切に同情深き購讀者諸君の寬假諒恕を希ふ、

第壹版



者中には主として同類中の他者を食ふもの多し。

軟體動物は利用の途頗る廣く,頭足類中には食料のイカ,タコ等を含み,イカの甲は鑄型,傷藥,ポンスの原料等となり,其墨嚢よりは油繪具のセピアを製す可し,腹足類は動物界中昆蟲類に次で種類多く,食用に供せらるゝものも亦少からず,歐洲にては或種の蝸牛を食膳に上せ,鮑の肉は熨斗に製し,美麗なる貝殼は裝飾用となり,貝細工,螺鈿,貝釦,貝カメオ等の原料となり,寶貝の類は蠻人の貨幣となり,ホチガヒ類,レイシガヒ類等よりは曾て紫色の染料を採りしことありと云ふ,瓣鰓類は食料として有用なるもの最も多く,眞珠を孕み,石灰を生じ,イタヤガヒの殼は貝杓子となり,硨磲の殼は水盤となり,窓貝の殼は以て玻璃に代用す可く,玉珧類の貝絲は以て黃金布を製す可し,其他蛤の貝覆,香盒,膏藥入,牡蠣の胡粉等一々枚擧に遑あらず。

本書に採用せる軟體動物分類の綱目下の如し,

第一綱　**雙神經類 (AMPHINEURA)**

　第一目　**多板殼類** (POLYPLACOPHORA)〔例ヒザラガヒ類〕

　第二目　**無板殼類** (APLACOPHORA)〔例ネオメニア,キイトデルマ等〕

第二綱　**腹足類 (GASTROPODA)**

　第一亞綱　**扭神經類 (Streptoneura)**

　第一目　**楯鰓類** (SCUTIBRANCHIA)〔アマガヒ類,サラサバテイ類,アハビ類,ヨメガカサ類〕

　第二目　**櫛鰓類** (PECTINIBRANCHIA)〔ホチガヒ類,バイ類,マクラガヒ類,蜀紅螺類,イモガヒ類,ソデガヒ類,タマキビ類,クマサカガヒ類等〕

　第二亞綱　**直神經類 (Euthyneura)**

　第一目　**後鰓類** (OPISTHOBRANCHIA)〔ナツメガヒ類,アメフラシ類,ヒトヘガヒ類〕

　第二目　**有肺類** (PULMONATA)〔蝸牛類,モノアラガヒ

貝類に於けるが如く幼殼片に各一齒を具へて魚體に鈎着す(此特形の幼貝を "Glochidium" と稱す)。

軟體動物の天壽は旣に確められたる例實に少し，陸產の天壽は概して二年位なるべきも，幽閉の狀態にありては更に長命せし例なきに非ず，海產には更に長命の者多く，普通の牡蠣の如きも五年位を經過せざれば成熟の域に達せず，而して成熟後更に幾年の壽命を保つ可きは勿論にして，硨磲の如き巨大重厚の貝殼が其成熟に更に多數の年月を要すべきは決して疑を容れず。

陸產貝類は皆冬眠 (hibernation) の習性を有し，寒風枯葉を拂ふの候となれば木の根，瓦石等の下に埋匿す，熱帶地方にありては陸貝は炎暑焬くが如き乾季の間，其殼口に閉殼膜 (epiphragm) を張りて蟄伏す，之を夏眠(aestivation)と云ふ，而して此夏眠陸貝中には生命强靱なるもの少なからず，濠洲の池沼に產する一種の二枚貝は水外にありて一年間生存せしことありと云ふ，又陸貝中には二年乃至五年間斷食幽閉せられながら猶ほ生命を保ちし例少からず，大英博物館の標本として西曆千八百四十六年三月臺紙に粘附せられし一ケの埃及砂漠產普通蝸牛(*Helix desertorum*)は千八百五十年三月に至りて猶ほ生活せるを發見せられ，之を水中に投せしに再び殼口を出でゝ匍匐したりと云ふ。

軟體動物の地上に發現せしは動物發生史の初代に屬し，鸚鵡貝類，薇石(ゼンマイ)類，直角石類等の如き無數の四鰓類は最古の古生界化石中に多く發見せられ，少數の腹足類及瓣鰓類も亦之と共存せるも，其繁榮を極めしは寧ろ地史の後期に屬し，第三系化石貝中には現種と識別し難き者多し。

軟體動物の多數は海產にして或は海岸を隔つること數百千里の洋面に浮び，多數は干滿兩潮線の間と淺海とに住し，或は水面より五哩の深海底より採集せられ，山林，谿谷，砂漠等の陸貝も亦無數にして，河湖の貝類も亦尠からず。

軟體動物には草食性のものと肉食性のものとありて，後

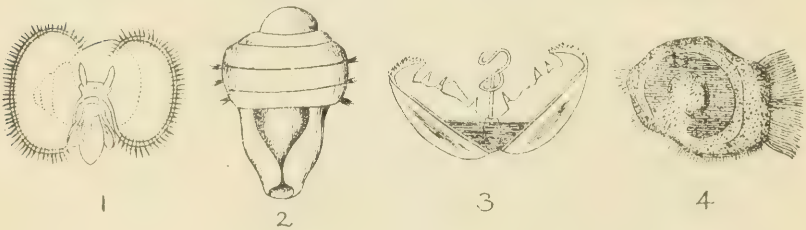
達すと云ふ，越中䗄類（Common whelk）の卵嚢塊は多く疊積し不規則の塊をなして往々海濱に發見せられ，一塊に五六百ケの卵を數へ，一嚢に數百卵を含むも，實際に孵化を遂ぐるものは一嚢中僅かに三四十卵なるべし。

ウミウシ（*Doris*）ミノウミウシ（*Eolis*）等の卵は螺旋せる紐狀物中に含まれ，ツメタガヒ類の卵は砂と膠質物とにて作られたる領子狀物中に含まる。

陸產貝類は血緣近き海產の貝類に比して產卵數少く，往々軟かき薄皮に被はるゝも亞米利加產ストロフオキラス（*Strophocheilus*）及亞弗利加產アカチナ（*Achatina*）の如き最も大形なる陸貝の卵は石灰質の硬殼にて保護せられ一卵の直徑一吋に達せるものあり，又淡水產貝類の卵は膠質の一塊に包まれ，一貝の產する所三十乃至百卵なるを常とす。

瓣鰓類の產卵數は概して多數にして，普通の牡蠣は百万ケ內外の卵を產し，米國の牡蠣の產卵數は其十倍乃至六十倍に達し河產二枚貝中には一貝にてよく二百万の卵を產下するものありと云ふ。

軟體動物の發生にも亦種々あり，或は卵より孵化して著しき變化なく漸次親の形となり，或は幼體の前端附近に纖毛の環を具へ（"Veliger" larva と稱す），或は淡水產二枚



1　2　3　4

第六圖；貝類の幼蟲

1, 腹足類（*Rissoa costata*, Lovén 氏より）

2, 掘足類（*Dentalium entalis* L., Kowalewsky 氏より）

3, 瓣鰓類（*Unio*の一種, Balfour氏より）

4, 同上（牡蠣の一種, Brooks氏より）

又頭眼は淡榮類及鶯貝類に認められたり，それよりも構造複雑にして觸官の變生物たる眼は往々瓣鰓類（例ホタテガヒ類）の外套膜緣に發見せらるゝことあり，該眼は脊椎動物の眼に類似して視神經纖維は網膜細胞の遠端より入り多數の無脊椎動物に於けるが如く網膜細胞の近端より入ることなし，又同構造の眼は無殼のイソアハモチの背部にも發見され,其數約百ケあり。

或種のヒザラガヒ類の殼上には一種の眼を有せることあり,該眼は多分觸官の變化せるものなるべく,他の軟體動物の普通の眼と同じく神經を通じ，其數往々一万に達することありと云ふ。

頭足類の耳は其眼と同じく其始め開孔として現はれ漸次閉塞して僅に一狹隙を殘し以て外界と通ず，所謂貝類の耳なるものは其實單に外界の變化を知るの器官たるに過ぎざるが如く，往々一閉胞をなして深く足肉中に埋在せることあり。

食肉性の腹足類にありては嗅官を有せると疑を容れず,體壁の細胞の一群變じて嗅器 (osphradium)をなし,鼻の作用或は呼吸水の性質を知るの作用を營む。

雌雄は高等なる軟體動物にありては別々なるも,有肺類,後鰓類及び或種の瓣鰓類の如き下等の種類にありては雌雄同體なり，繁殖は皆卵によるも或種の淡水產貝類（例タニシ等）にありては卵は實際輸卵管內にて孵化するを以て恰も胎生なるが如く，又瓣鰓類は多く孵化する迄其卵を其双殼內に保留するを常とす。

軟體動物の卵は多く卵囊に包まれ塊をなして產着せられ往々構造複雜にして人を驚かすに足るものあり，マイカ類 (Cuttle) にありては葡萄狀に群り一囊には只一胎を含むのみなれども，ヤリイカ類 (Calamary) にありては長囊の放射塊をなし各囊に三十乃至二百ケの卵を包み，其一種なる *Loligo vulgaris* の一卵囊塊中に含める卵數は往々四万ケに

こさを得べく,其上に長き角質板を有し,其上面に無數の齒を具ふ。

眼は瓣鰓類にありては頭部なきを以て殆んど皆之を欠けるも他の類にありては概して之を具へ，殊に頭足類にありては眼の發達の段階を認むべし，例へば鸚鵡貝類にありては眼は單に一ケの開孔に過ぎず，スルメイカ類にありては眼は二室より成り，前室は外界と通じ海水自由に其中に入り，後方はレンズにて限らるゝもマイカ類にありては前室の前面も全く閉づ，而して頭足類の發育を檢すれば何類の眼も初めは皆開孔狀を呈し，地質學上最古式頭足類の一なる鸚鵡貝と同樣なる程度を通過するを知るべし。

腹足類にありても眼の發達の段階を認む可く，ヨメガカサ類にありては眼は單に皮膚上の凹所にして，色素細胞及網膜細胞を以て內面を覆はるゝのみなれども，馬蹄螺類にありては凹所は嚢狀となりて膠質物を充たし，其頂は猶ほ開きて海水に洗はる，進んで榮螺類となれば嚢は全く薄き表皮にて閉ぢられ，更に進んで骨貝類の或種の眼となれば眼上の表皮頗る厚く,眼球中にレンズを有するを見る,此レ

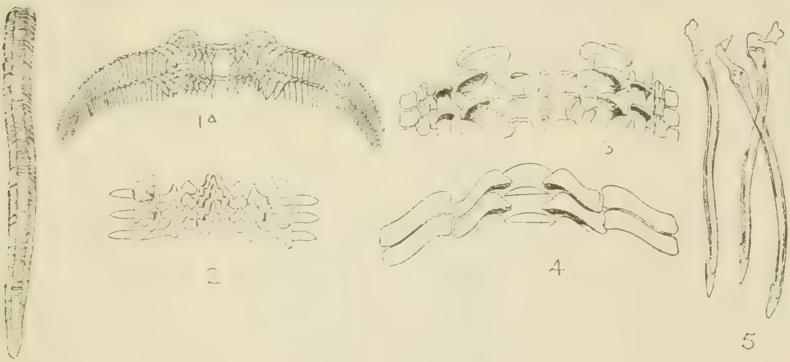


第五圖；ホチガヒ類の眼　(Hilger より)

ンズは多分馬蹄螺類，榮螺類等の膠質物に相當するものなるべく,又高等動物の眼の硝子體に匹敵する者なるべく,又以て骨貝類が腹足類中の高位を占むる一證となすに足る。

は心耳も對をなせること二鰓頭足類（タコブネ，タコ，イカ等），前鰓類中の兩鰓類（アハビ等），及び瓣鰓類全體に於けるが如く，雙神經類（ヒザラガヒ等）にありては二組の複鰓に對して二心耳を有し，四鰓頭足類（鸚鵡貝）にありては四心耳を具ふ，又鰓が一ケなるか或は兩鰓一側に位するときは心耳も亦同側の一ケのみ發達せること後鰓類中の被鰓類（キセワタ等），前鰓類中の櫛鰓類全體（尖舌類，紐舌類，及び翼舌類）及前鰓類中の單鰓類（サラサバテイ科，アマヲブネ科等）に於けるが如し，但單鰓類にありては心耳は左右共に存在せるも右心耳は單に一閉嚢をなし，兩鰓は左側に結合せるを以て心耳の作用は全く左心耳の負擔する所なりとす。

鰓は亦呼吸以外の作用を營むことあり，瓣鰓類にありては頭部なく，捕食の器官なきを以て鰓面を被へる纖毛ありて水流を起し，水中に混ぜる微生物を口邊に導くの用をなす。



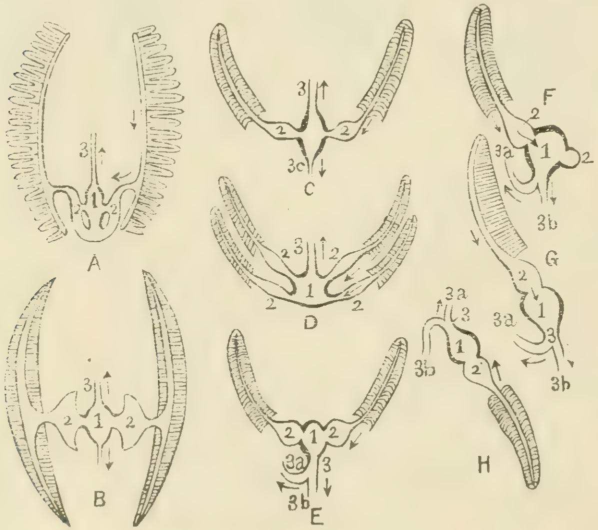
1

第四圖；齒舌の例．1,腹足類（スガヒ×3）1a，同上ノ一部（齒二列を示す）
2，頭足類（*Polypus tetracirrhus* D. Ch.の齒三列）
3，雙神經類（*Acanthopleura spiniger* Sowb.）
4，掘足類（*Dentalium entalis* L.）　5，腹足類（タガヤサンミナシ×5）
（1，1a．5 原圖；2，3，4 Cookeより）

瓣鰓類以外の軟體動物は殆んど皆口腔底に齒舌（radula）を具ふ，其基部は軟骨より成り，筋肉によりて前後に動く

を多螺狀と稱す),關節層(アマヲブネ屬等),放射層(フネアマガヒ類)等の種類を生じ,核の位置より云へば中心核(サラサバテイ屬等),側核(テツボラ類),端核(ナガニシ類)等の種類を生ず。

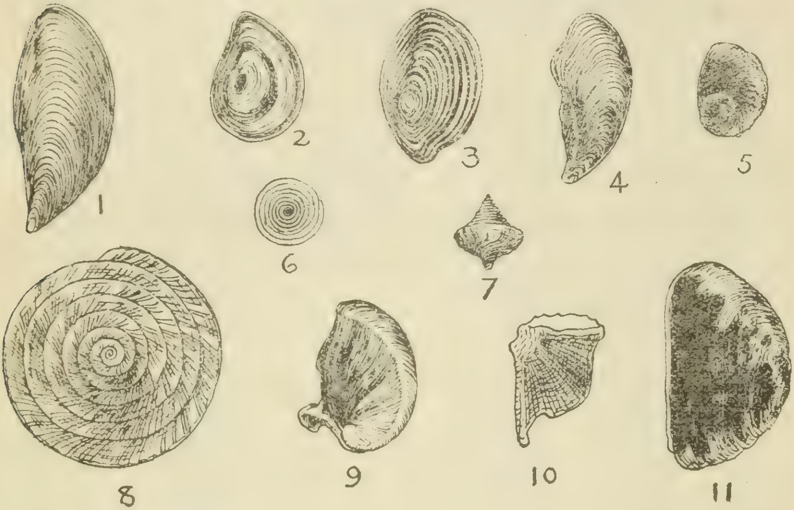
體の兩側にある絲狀突起は所謂鰓絲にして往々其前後にあるものと相癒合して板狀を呈す,牡蠣,淡菜(イカヒ)等にありては最もよく發達せるを以て此等二枚貝類を總稱して瓣鰓類と云ふ,若し動物體螺旋し,或は捩れたるときは一方の鰓は遂に全く消失せることあり,又體小さく其壁薄きときは鰓は兩方とも全く消失せることあり(例,裸鰓類の *Phyllirhoë* 等),又鰓の消失を補はんが爲めに外套變じて一種の肺をなせることあり,陸貝に其例多し。



第三圖;貝類の鰓と心臟と大動脈との關係を示す模型圖.(A)ヒザラガヒ類,(B)瓣鰓類,(C)二鰓頭足類,(D)四鰓頭足類,(E)前鰓兩鰓類,(F)前鰓單鰓類,(G)前鰓單心耳類,(H)後鰓被鰓類,1,心室;2,心耳;3,大動脈;3a,頭動脈;3b,內臟動脈;3c,後動脈.(A. Langより)

鰓と心臟とは密接の關係を有し,鰓が對をなせる場合に

るが如く，又足の他部は頭足類の漏斗てふ推進器となりて足の本來の用をなし，馬刀等は其筋肉の足を以て砂泥を掘り，モノアラガヒ類は足を以て倒に水面を匐ひ，蝛類は之を以て岩石等に吸着し，鳥貝類は之を以て海底を跳躍す。



第二圖；腹足類の暦. 1, ナガニシ; 2, タニシ; 3, ホチガヒ; 4, オニコブシ; 5, エゾタマキビ; 6, アツブタガヒ; 7, ゴマフナハメグルマ; 8, サラサバテイ; 9, ニシキアマチブ子; 10, *Septaria* (フ子アマガヒ類);11, ホソスヂテツボラ (1-9, 11 原圖,10 Fischerヨリ)

腹足類は多く足の上面に暦と稱する硬き部分を具へ，動物が殼內に退縮するに際して一部或は全く殼口を閉塞するの用をなす，或は石質重厚なること榮螺等に於けるが如く，或は角質薄弱なること田螺等に於けるが如く，暦の形及核の位置も亦種々にして分類の要件となることあり，形態上より云へば圓錐暦(ナハメグルマ屬，ヤマグルマ屬等)，中空暦(アツブタ貝類)，蝸脉暦(タニシ屬等)，覆瓦暦(ホチガヒ類等)，鈎爪暦(オニコブシ屬，ナガニシ類等)，螺脉暦(右卷貝では左卷，タマキビ屬等に於けるが如く螺旋の回數少きを寡螺狀と云ひ，サラサバテイ科等に於けるが如く回數多き

子の二大科より出でたるものゝ如し。

有肺類の起原は未解の問題に屬す，或は之を裸鰓類より來れりと考へ，或は之を被鰓類より來れりと考ふるも，就中後者眞に近きが如し。

第三章　軟體動物概說

軟體動物は全體柔軟にして環節なき冷血動物なり，神經系の中樞なる腦神經節は食道の始部の上に位し下方の神經節と神經の連絡を有す，心臟は二室以上より成り，背側に位し，血液を體內諸器官の間隙に推進せしむ，內骨格なく，只頭足類中に內軟骨を具ふる者あるのみなれども，多くは外套膜と稱する體の外被より硬殼を分泌して之を補ふ，而して該貝殼は或は蛤等に於けるが如く二枚より成り，或は螺類に於けるが如く一ケより成り，或はヒザラガヒ類の如く一組數枚の殼板より成る，該貝殼のよく發達せるものは多量の炭酸石灰を沈澱して堅硬なるも，或は *Cymbulia* に於けるが如く膠質を呈し，或は蛞蝓類章魚類に於けるが如く全然貝殼を欠如せるものあり，或は殼を以て體を被ひて之を保護すること蛤，蝸牛に於けるが如く，或は外套の褶間に殼を藏すること雨虎(アメフラシ)類に於けるが如く，或は全く體內に埋存せること烏賊(イカ)に於けるが如きものあり，或は角貝の如く長管狀を呈し，或は蝛(ヨメガガサ)類の如く杯狀を呈し，或は蝸牛等の如く螺狀を呈す。

外套膜は或は體の兩側にありて瓣狀を呈せること二枚貝類に於けるが如く，或は其大部體壁に附着して肺腔をなせること蝸牛，蛞蝓の類に於けるが如し。

動物の腹面は延長して所謂“足”となり其形種々あり，或は斧狀を呈し，或は曲りて跳躍の用をなし，或は蹠狀を呈して匍匐の用をなす，足緣も亦種々に變化し或は延長して長突起をなし吸盤を備ふること章魚類の腕に於けるが如く或は腕數多くして短く吸盤を有せざること鸚鵡貝類に於け

地，粘土を好み，或種は靜水にのみ住し，或種は急流にのみ產す。

就中熱帶は貝類豐富美麗にして，殊に潮汐昇降の差著しくして諸種の住所を有せる地方にありては貝の種類最も多しとす。

陸產及淡水產軟體動物の起原は之を海に求めざる可らず或場合にありては，海產より非海產となるの變化今猶ほ進行中にして，今日之を目擊するを得べきものあり，或は其變化は已に完結せるも，其變異甚だ微少，其期日極めて近世的にして，二者の關係一目瞭然たるものあり，或は其變化甚しく，其期遼遠にして，殆んど其起原を尋ぬ可らざるあり。例へば裏海はもと地中海と連りしものなるべければ，必ずや古昔は其中に海產貝類を有せしなるべし，現今の裏海產貝類は皆半鹹或は淡水產なりと雖も，其一般の形狀は明かに海產的なり，卽ち該湖產螺類廿六種中，十九種は特別なる四屬に屬し，而して其四屬は皆海產リソツボ類(*Rissoidæ*)より變せしものにして，又該湖特產の雙殼類は三屬に屬し，皆地中海產ザルガヒ類の一種（*Cardium edule*）より來れるを證すべしと云ふ。以上の事實に由りて考ふれば，裏海產の諸貝は，該湖が遂に全く地中海と分離せしことゝ，其漸次鹽分を減せしことによりて，遂に多くの新屬を生ぜしものなるが如し。又亞弗利加內地のタンガンイカ湖に住する數種の淡水貝類は，不思議にも海產的形狀を具ふるを以て或學者は太古該湖が印度洋の入江なりしならんと思考せり，然れども陸產及淡水產貝類の起原は皆必しも海灣の閉塞，鹹湖の乾涸等の如き境遇の變化のみによりて說明するを要せざるは素より論を待たざるなり。

有臍陸產貝類の起原は二樣に之を考ふることを得べし，(1)海產より海岸產と變じ，遂に陸產と變ず，(2)海產より淡水產と變じ，漸次泥沼に上り，遂に陸產と變ず，この二說卽ち之れなり。而して總ての有臍陸貝はタマキビ及アマヲブ

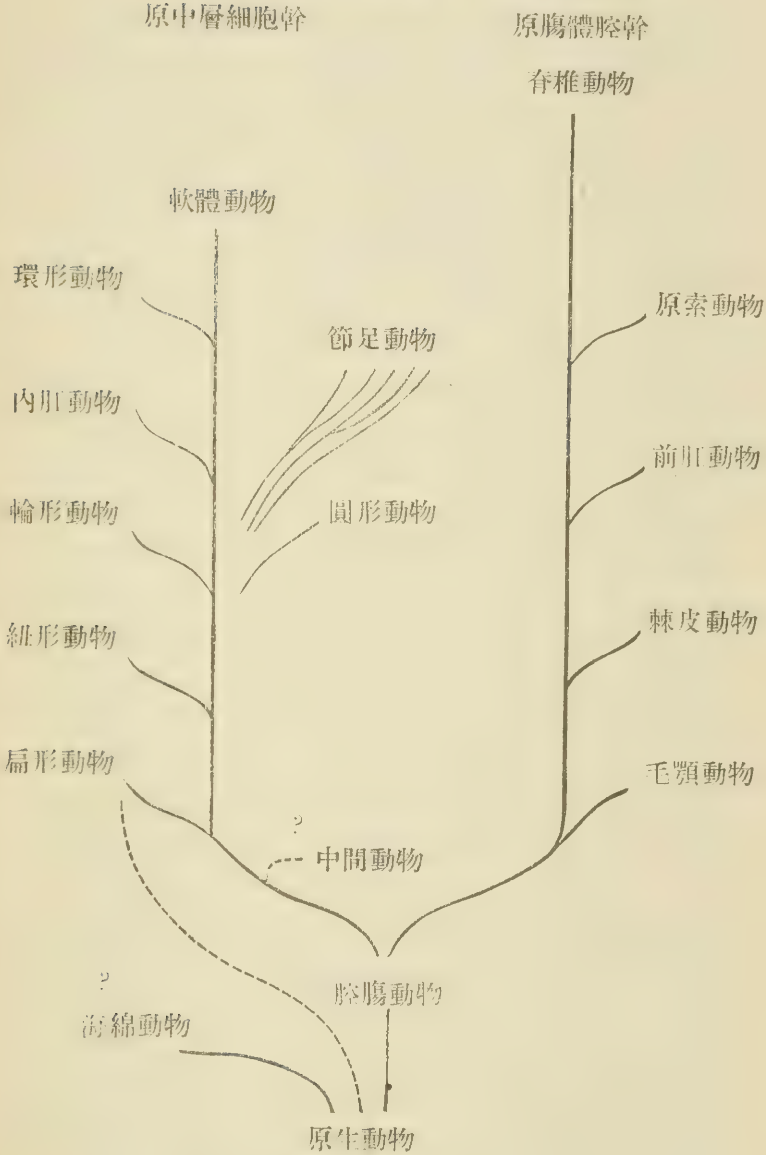
第二章　軟體動物の起原

地球上の總ての生物は其始を尋ぬれば皆海中に發生せしものなるが如し，これ有名なる諸學者の一般に承認せる所なり，然れども廣大なる海水の全體何所も悉く生物の發生に適せるには非ず，試に思へ，森渺たる太洋の水面には生物の隱れ家もなく，其休憩所もなく，又深海は暗黑，寒冷にして變化なきを以て二者共に生物の發生を催すに適せず，而も今日此等の深海，洋面に無數の生物を見るに至りしはこれ皆他所に發生して其繁榮を極め，而して後漸次に移住せしものなるべし。

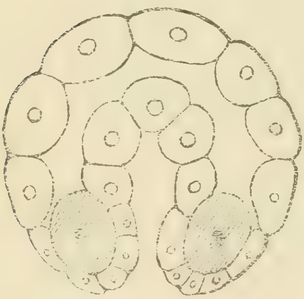
之に反して海岸に近き淺海にありては水流不定にして明暗相交り，變化に富み，而も極端に走らず，温度と潮汐との影響著しきを以て，植物こゝに發生して其繁茂を極め，動物の餌食となり，從て無數の動物を發生せしめしことは少しも疑を容れず。然れども一利一害は數の免れざる所，淺海の動物は怒濤に撃たれ，岩石に衝突し，滿潮は之を汀上に導き，退潮は之を砂上に殘して鳥獸の貪食に任せ，空氣光熱の破壞作用に暴露せしめ，更に魚類の之を嗜むあり，水禽の之を啄むあり，同類相害するあり，是に於て“適種生存”の理行はれ，こゝに無數の種類起り，軟體動物にありては多く硬殼を被むるに至り，或は砂を掘り，或は岩を穿ち，或は岩上等に附着し，遂に種々の習性と形狀とを生ずるに至りしなるべし。

世界陸地の海岸は極寒地の外，殆んど貝類の繁殖を見ざる所なく，各地各種の特產ありて，特產地以外にありては只不定的に之を產することあるに過ぎず。例へば河口の砂底石灰質の泥底，或は砂浦•礫汀或は斷崖•絕壁各其特產を有し，深海•洋面亦各其特產を有せざるはなし，陸產及淡水產貝類に至りては或は丘陵に上り，或は谿谷に下り，或は樹洞に隱れ，或は牧場を匍匐し，或種は石灰岩を選び，或種は砂

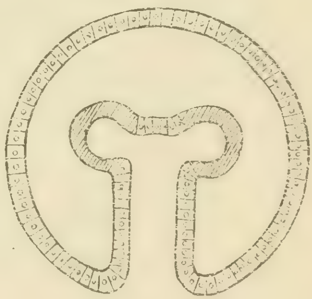
動物の系統樹（谷津博士）


原中層細胞幹
原腸體腔幹
脊椎動物
軟體動物
環形動物
節足動物
原索動物
內肛動物
前肛動物
輪形動物
圓形動物
紐形動物
棘皮動物
扁形動物
毛顎動物
?
中間動物
腔腸動物
?
海綿動物
原生動物

ることも能はず且つ胎の類似に依りてのみ動物相互の關係を極論す可らざるは勿論なりと雖も，比較解剖學と比較發生學との研究によりて幾分か動物界に於ける軟體動物の位置を推定し難きに非ず，谷津博士の"動物分類表"に採用せられたる推定によれば原生動物は一方に海綿動物を出し，他方に腔腸動物を生じ，腔腸動物は更に發達して二大幹となり，甲は發生の初期に於て細胞の數少く，二個の原中層細胞(teloblasts) ありて，之より中層を生じ,乙は發生の初期に細胞の數多く其中層は原腸よりの囊として生ず，甲は漸次に扁形,紐形,輪形,内肛,環形の諸動物を分化して軟體動物となり，又圓形動物と節足動物とを枝出し，乙は順次に毛顎，棘皮，前肛，原索の諸動物を分化して遂に脊椎動物を生ぜしこと次圖の系統樹に示すが如し，



A



B

第一圖; A, {原中層細胞幹に屬する 動物の胚囊縱斷想像圖}　B, {原腸體腔幹に屬する 動物の胚囊縱斷想像圖}

(原中層細胞及原腸囊は斜線を附して之を明にす)

(谷津博士)

る難く，學者によりて其順序を異にするも亦已むを得ざるべし。

軟體動物は近年迄マラコゾア (Malacozoa) てふ一大門中に編入し,マラコゾアを四大別して(一)軟體動物 (Mollusca),(二)被嚢類(Tunicata), (三) 腕足類 (Brachiopoda), (四)苔蘚蟲類(Polyzoa 或は Bryozoa) とせしが，諸學者の研究其歩を進むるに從ひ，其相互の關係甚だ疎なるを發見するに至れり。

例へば被嚢類は其發生の經路より考ふれば脊椎動物の次に位す可きが如し，何れの方面より觀るも軟體動物は全く孤立の位置にあり，故に吾人現今の智識にては固より他動物との關係を確定すること能はず，動物の化石が始めて明かに地層中に見はれしは古生界の最下層寒武利亞系なるが，此遼遠の古代に於て已に現今と同樣なる各門の區別ありて海綿動物,棘皮動物,軟體動物及蠕形動物の別判然たるを見る，故に如何なる進化論たりとも現今の智識の程度に於て或一門が他門より分化し來れりと確論するは大早計たるを免れざるべし。

動物中相互の關係は往々其發生中，胎の類似を參考して定め得ることあるも,餘り極端に之を論ず可らず,軟體動物の一特徴は其發生の途中に必ず「ツロコスフイア」(Trochosphere) と稱する幼蟲の一特形を有するにありて,環蟲類の二目毛足類 (Chaetopoda),螠類 (Echiuroidea) 及苔蘚蟲類 (Polyzoa) も亦同樣の時代を經過し,輪蟲類の成蟲も亦此等の幼蟲に酷似せる形狀を有すと云ふ。

前述の如く無脊椎動物は化石を含める最古層にありて既に數門に分化せるを以て化石學によりて其系統發達を研む

VI 輪形動物 Trochelminthes (クルマムシ類)

VII 内肛動物 Endoprocta (ウミウドンゲ類等)

VIII 環形動物 Annelida(ゴカヒ類,蚯蚓類,蛭類等)

IX 軟體動物 Mollusca (イカ類,タコ類,貝類等)

X 圓形動物 Nemathelminthes(蛔蟲,蟯蟲,ハリガチムシ等)

XI 節足動物 Arthropoda (甲殼類,昆蟲類,蜘蛛類等)

XII 毛顎動物 Chaetognatha (矢蟲等)

XIII 棘皮動物 Echinodermata (ヒトデ類, ウニ類, ナマコ類等)

XIV 前肛動物 Prosopygii (苔蟲類, ホヽヅキガヒ類, メクワジヤ類等)

XV 原索動物 Prochordata (ギボシムシ,ホヤ,サルバ,ナメクジウヲ等)

XVI 脊椎動物 Vertebrata (魚類,鳥類,獸類等)

初等,中等教育程度の教科書,及び通俗的の著書に於ては上記の中,中間動物,紐形動物,輪形動物,内肛動物,毛顎動物,前肛動物,原索動物は種類少きを以て之を他に併合し,或は之を省略し,扁形動物,環形動物,圓形動物,の三者を合して蠕形動物と稱し,次の八門となせるもの多し,

1,原生動物　2,海綿動物　3,腔腸動物

4,棘皮動物　5,蠕形動物　6,節足動物

7,軟體動物　8,脊椎動物

然るに動物はもと自然に下等より高等に進化せしものなれば盡く截然人爲の分類に契合す可きものにあらず,往々曖昧なる中間種或は全然所屬を詳にせざる種類を發見すべきは理の當然にして,今より百有六年前にラマークが唱道せし如く,動物はもと梯子狀に配列せるものに非ずして樹枝狀に發達せるものなれば上記諸門の席次を定めんこと頗

日本小貝類學

平瀨與一郎著

第一編　總　說

第一章　動物界に於ける軟體動物の位置

動物の科學的分類は西暦紀元前四世紀に於けるアリストテレスの八類を始めとして紀元千七百三十五年に公にせしリンチの六類，千八百九年に發表せしラマークの十六類，千八百二十九年のキユビエーの十五類等を經て千八百四十八年ロイカート氏の八類となり，全く近世の分類と大差なきに至れり，其八類は次の如し，

1，脊椎動物，　2，軟體動物，　3，節足動物，
4，環蟲動物，　5，蠕形動物，　6，棘皮動物，
7，腔腸動物，　8，原生動物．

谷津博士の"動物分類表"に採用せられたる分類次の如し，

I	原生動物	Protozoa	（アメーバ，ザウリムシ，有孔蟲等）
	中間動物	Mesozoa	（*Dicyema*等）
II	海綿動物	Porifera	（海綿類，偕老同穴，拂子介等）
III	腔腸動物	Coelenterata	（水母類，珊瑚類，櫛水母類等）
IV	扁形動物	Plathelminthes	（渦蟲類，吸蟲類，條蟲類等）
V	紐形動物	Nemertini	（ヒモムシ類）

服部兵庫縣知事閣下
平瀨貝類博物舘長殿　贊助

▲日本產貝類陳列

外國產貝類

參考品陳列

舞子介類館

舞子公園西海濱

平瀨介舘廣告

◎出版物◎

●介類雜誌

第一卷　十部　代價郵稅共　金貳圓
第二卷　十二部　同　金貳圓參拾錢
第三卷　四部(總目錄及索引表付)同　金八拾四錢

●普通貝類の栞　一册定價金拾五錢　郵稅貳錢

●平瀨貝類博物舘案內

縱九寸、橫三寸、袖珍形美本、コロタイプ版口繪八枚
紙數百頁、概ね六號活字、定價金拾五錢送料貳錢

平瀨與一郎著

●貝千種　第一及第二卷既刊

用紙奉書、木版彩色刷、折本仕立、畫譜、美裝
定價一册　金貳圓五拾錢送料一册金八錢、二册金拾貳錢

平瀨與一郎著

●貝殼斷面圖案(第一)　木版日本紙　大一册
定價　金壹圓　郵稅金八錢

●貝類繪はがき類

▲第一輯(生態の部)　各五枚一組
▲第二輯(吉祥の部)　定價一組　金拾貳錢づゝ
▲第三輯(紋樣の部)　送料　貳錢
▲珍貝繪はがき　五枚一組　金拾貳錢　送料貳錢
▲芋貝繪はがき　五枚一組　金拾錢　送料貳錢
▲平瀨貝類博物舘觀覽記念繪葉書　二枚一組　金參錢　送料貳錢

平瀬介館 **特殊貝類標本**

貝類博物館主平瀬與一郎特撰

●普通教育用貝類標本

定價
甲組（五十種一組、木製箱二層入）金五圓
乙組（同　上）金五圓
丙組（大形貝類彩色石版圖）（十二枚一組ボール紙製筒入）金七拾錢

送料 甲、乙は各五拾錢 丙は拾貳錢

●觀賞用貝類

▲浦のにしき
甲、十二種上製桐箱入（蓋に燒繪を以て海景を畫く）價金參圓
乙、廿五種上製桐二重箱入（燒繪付）價金五圓
送料 各貳拾錢

▲海の華
各十二種宛總布張内天鵞絨張美箱入 定價（大金貳圓 中金壹圓五拾錢 小金壹圓）
送料 大拾五錢 中及小各拾貳錢

▲貝のいろ／＼
桐箱入（蓋に水彩を以て海岸の景色を畫く）一組十二種 定價（大金壹圓貳拾錢 中金八拾錢 小金五拾錢）
送料 大拾五錢 中及小各拾貳錢

▲濱の錦
十五種ボール製箱入 定價金五拾錢
送料 拾貳錢

▲貝つくし（兒童用標本）
一組各十二種、ボール紙製美箱入第一より第三迄既成 價一組金拾五錢送費五錢

●貝殼利用標本

a 原貝廿八種同上製品六十點 價金拾八圓
b. 右原貝を除き製品六十點 價金拾壹圓
c. 原貝二十二種同上製品二十二點 價金九圓
d. 右原貝を除き製品二十二點 價金參圓貳拾五錢

●貝釦製造標本

a. 原貝幷に其製釦九種及製造順序標本
b 原貝幷に製釦十二種及製造順序標本
a 金四圓 b 金五圓

●色層應用彫刻標本

a. ホシダカラ色層標本 價金八拾錢
b. 同上彫刻標本（丸貝） 價金壹圓貳拾錢以上
c. 同上彫刻を用ひて裝身具を作りしもの 價金六拾錢以上

●色彩變化標本

（シヨクコウノニシキ、ヒアフギ等標本六乃至十個を以て一組とす） 價金參圓以上

其他郵券貳錢封入御申込あれば弊館略案内一枚御送付可申候

貝類標本

當館は貝類研究を以て我が學界に多少の貢献をなさんと欲するにあれば普通の標本商人と同視せられざらんことを望む。
標本は特に採集者を使用し生貝を捕獲せしものなれば産地精確形態完全なり。
學名和名は精査に精査を重ね更に歐米大家の再調を煩はしたるにつき少しの誤謬なきを保證す。
組標本代價次の如し（木製容器及目錄附き、購入者の都合により紙製陳列盆及學名箋を以て木製容器及目錄に更ふることを諾す）

種數	大凡個數	代價（円）
五〇	一〇〇	七、〇〇
一〇〇	二〇〇	一七、〇〇
二〇〇	四〇〇	三五、〇〇
三〇〇	六〇〇	五五、〇〇
四〇〇	八〇〇	八〇、〇〇
五〇〇	一、〇〇〇	一一五、〇〇
六〇〇	一、二〇〇	一五六、〇〇
七〇〇	一、四〇〇	二〇三、〇〇
八〇〇	一、六〇〇	二七二、〇〇
九〇〇	一、八〇〇	三四二、〇〇
一、〇〇〇	二、〇〇〇	四三〇、〇〇

荷造費及遞送料等は代價の外に申受くべし。
特に珍種のものを組入るゝことを望まるゝ時は其差額を別に申受くべし。
以上組標本は陸産及淡水産も多少加はるものとす。
外國産の種も需に應ずべく當館持合なきものも取り寄せの依頼に應ずべし。
當館發行目錄に記載なき種と雖も持合のものは需に應ずべきにつき一應照會せらるべし。

京都市岡崎町　平瀨介舘
電話上四一七二
振替東京一二〇五二

2.18.16.

~~Hirase, Y.~~

~~(Work on conchology)~~